中井正一の「委員会の論理」（1936）と三木清の関係
――印刷メディアにおけるコミュニケーションの双方向性の復活の可能性への言及に着目して――

“The Logic of the Committee”（1936) of Masakazu NAKAI and NAKAI’s Influence on Kiyoshi MIKI: Reconstruction of Interactivity of Communication

後藤嘉宏（筑波大学），中林幸子（筑波大学），戸邉俊哉
Yoshihiro GOTO（University of TSUKUBA），
Yukiko NAKABAYASHI (University of TSUKUBA),
Shun’ya TOBE

抄録
中井正一の論文「委員会の論理」（1936）はメディア論の古典とされる．本稿は同論文を中心にした中井のメディアの考え方の特徴を，三木清との比較によって，明らかにする．中井に影響を与えた先輩として三木は知られる．しかし後輩中井から三木への影響もあるとされる．本稿はその点を検証した．久野収は，中井「言語」（1927,1928）から三木「解釈学と修辞学」（1938）への影響を示唆したが，歴史上の当事者として証言するのみで，テキストを比較しての証明はしていない．本稿では「言語」「委員会の論理」という中井の論文と「解釈学と修辞学」等の三木の著述との関係を検討しながら，中井と三木の共通の問題関心を，両者の異なる部分と併せて照らし出した．以上の作業によって，コミュニケーションの双方向性への志向の点で，中井の戦前の代表作「委員会の論理」と三木との深いところでの一致点を探り，危機の時代に対する彼らの処方の一端を明確にした．あわせて二人の相違点も炙り出し，「委員会の論理」の独自性の一局面を示した．

Abstract
Kiyoshi MIKI was known as the predecessor, like elderly brother, of Masakazu NAKAI, on whom MIKI had deeply influenced. But NAKAI also had influenced on MIKI. Osamu KUNO, the successor both of MIKI and NAKAI, of the department of philosophy in Kyoto University, implied the NAKAI’s influence on MIKI. But KUNO indicated it, without comparing their text. Owing to the suggestion of KUNO, this paper examines how the articles such as “Language” (1927,1928) and “The Logic of the Committee”（1936) of NAKAI influenced on “Hermeneutics and Rhetoric”（1938) of MIKI. Through this research, we can know how *The Logic of Imagination* (1939,1946) of MIKI and “The Logic of the Committee” of NAKAI had held the common strategy for the critical age, that is, the reconstruction of the interactivity of communication.

はじめに

中井正一の論文「委員会の論理」（1936）[1]（p.46-108）[2]（p.10-73）は，コミュニケーション論，メディア論の日本における基礎的文献であるとされる[3]（p.108）([4][5][6][7])[8]〔注のうち（ ）に入れた注の直後の注の中で言及する文献を予め示す場合，( )に入れることとする．以下同様．ここの場合[4]~[7]は[8]にて初出の文献を意味する〕．例えば「委員会の論理」に関する論文をいくつも書き続ける門部昌志は語る．“中井正一の論文，「委員会の論理」（一九三六年）は，日本におけるコミュニケーション論の古典である”[9]（p.115）．

コミュニケーションとメディアは横糸と縦糸の関係にあり，不即不離である．例えば中井は様々な機会に媒介〈メディア〉に相当する概念として，メディウム，ミッテル双方を対比的に使う([10])[11]．動きの少ないものをメディウム，あるものをミッテルと分ける．前者は媒体，メディアに相当し，元来一方向的である[12]．他方後者はコミュニケーションに相当し，双方向的な可能性が開ける．

読者の投稿を中心に構成される隔週刊新聞『土曜日』を刊行した中井は，後述のように，同時期に書かれた「委員会の論理」でコミュニケーションの双方向性を模索する．現代の双方向性は，印刷メディアの登場で可能になったと彼は唱える。社会の主流メディアが話し言葉（会話），写本，印刷本と移るにつれて，社会の支配的な論理も変化し，コミュニケーションの様式も変わる見通しを，同論文で中井は展望する．それが「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」という同論文の章句に示される．

本稿はこの「委員会の論理」を，中井が常にその存在を意識した三木清との関係から照らす．それにより三木未完の代表作『構想力の論理』（第一（冊）1939；第二 1946）[13]を意識しながら[14]，中井の戦前を代表する「委員会の論理」と三木との共通項を探り，彼らがコミュニケーションの双方向性にどう向き合ったかを考える．

特に久野収[15]と山田宗睦[16]がそれぞれ中井から三木への影響を論じているので，彼らの指摘を手がかりにする．

本稿 1．以降の論述と順序は逆になるが，まず山田が，三木を恩師西田幾多郎と対比的に描いた点に触れておく．

山田によると，西田はジャーナリズムを嫌い象牙の塔の中で暮らすことをよしとした．他方愛弟子三木は論壇志向が強い．ハイデルベルク逗留中に知遇を得た羽仁五郎と雑誌『新興科学の旗のもとに』を興し，岩波書店編集顧問を務めた三木は，ジャーナリズムとアカデミズムの接点を意識して仕事をした．

そこで編集者としての役割に努める三木を支えた力を，山田は構想的知性と表す．構想的知性とは，管弦楽団の指揮者や映画監督に求められるのと同じ力である．自分では音を出さない指揮者同様，編集者は自から筆を執らない．しかし，他者に書かせることで全体を見通し，自分の表わしたいものを形にする．この表現力を山田は構想的知性と呼ぶ[16]（p.31）．

しかも構想的知性を山田は中井の機能概念に関連させる．2．で後述するが，「機能概念の美学への寄与」（1930）[1]（ｐ.159-198）で中井はエルンスト・カッシーラーに依拠し実体概念に対する機能概念の優位を訴える．

“注目に値するのは，こういう編集機能が，出版のもつ言語文化の本性をこえるということである．出版はたしかに言語文化をはなれることができない．三木の後輩，中井正一がいうように，言語とは，本質的に実体の論理にしたがい，言語共同体の過去の共通の想い出にしたがって，事柄をとらえる．だが，編集者は，未定型の課題をとらえ，それを解くのに近似的可能性をもつと予想される執筆者たちを測定し，かれらを動

員し組合わせることによって解決しようとする”[14]（p.32）.

そこで山田は，中井の実体概念を，過去の想い出に繋がる言語というメディアに，他方，中井の機能概念を，「編集機能」すなわち「未定型の課題」を解く未来の「構想」に，それぞれ充てる．後者と三木の「構想力」との関連を指摘し，言語研究での中井の着想と三木の編集機能とを結ぶ（[17][18][19]）[20].

しかし詳細は後述するが，実体概念，機能概念の評価は中井と三木で少し違う．中井の両概念の対比は，実体概念から機能概念へという形で，基本的に後者を肯定的に捉え，「委員会の論理」は最終的には後者によって商品社会の諸問題を乗り越える見通しで論を進める．他方三木はその流れは意識しつつ，機能概念の否定的側面をまずは強調し，その上で「委員会の論理」と似た話を展開する.

次に久野の指摘の方に移ろう.

久野は中井が事実上主宰した同人誌『世界文化』の仲間で『中井正一全集』『三木清全集』双方の編者である．久野は，三木がレトリックに注目した契機に中井の「言語」があるという.

“三木さんの問題提出にさきだつレトリックの論理の自覚的指摘は，やはり，三木さんの同志であった中井正一が，京大哲学科の機関誌『哲学研究』に連載した論文「言語」（昭和二年九月，同三年四月）にはじまるとみるのが正しいと思います．中井正一の「言語」は，その側面から見るだけでも，実にすばらしいオリジナリティを発揮しています．三木さんは中井さんの論文を横ににらみながら，問題を新しく提出しなおしたのだといってよいのでしょう”[15]（p. 116〔（ ）は久野〕）[21].

このように久野も後輩中井から三木への影響に論及する．だが山田同様両者の文章の細かな比較はせず歴史の生き証人として方向性を示すに留まる.

なお三木の親友，羽仁五郎は中井を国立国会図書館長（実際には副館長になった）に推挙した．その際羽仁は，三木が中井を自分の跡を継ぐ後輩と語っていたと証言する [22]（p.142）．このように中井は三木の知的圏内にいる人物とされる.

本稿は中井の「委員会の論理」がどこまで三木と問題を共有し，どの点で異なるかを論じ，三木と中井の距離の遠近を確めることを目的とする．そのための媒介項として中井「言語」[1]（p.209-249）と三木「解釈学と修辞学」[23]（p.139-158）の繋がりを久野の指摘に従って比較し，また中井「機能概念の美学への寄与」と三木『人生論ノート』[24]（p.254-260）[25]（p.58-63）所収の「人間の条件について」の関連を山田の示唆に従って分析することとする.

これらいわゆる媒介項の検証の前にまず中井自身が，久野の着目する「言語」（1927,1928）の問題意識を，どう「委員会の論理」（1936）に繋げたかを検討する．さらに山田が三木との関連性に言及する「機能概念の美学への寄与」（1930）が，どう「委員会の論理」に通じるかを調べる.

これらとの検討を踏まえ，中井と三木を比較する.

先行研究として第一に，中井の「言語」と「委員会の論理」の関係については門部の論攷がある[9][26]. ただし門部は本稿次章で取り上げる側面について両論文の継続性に着眼し，断層には言及しない[26]（p.133）.

第二に，三木から中井への影響を探った先行研究もあるが[27][28]，本稿では反対に中井から三木への影響を扱う.

後者の影響については，上述の久野や山田の示唆的論及があるのみで，仔細にテキストを比較した研究はない.

よって本稿は三木と中井の深い地点での繋がりを示し，メディア論の古典「委員会の論理」の意味を問い直す.

1.「いわれる論理」と「印刷される論理」

1.1「言語」でのメディアの区分

三木に影響を与えたと久野が証言する中井の論文「言語」（1927,1928）について門部は，“メディアという言葉が用いられていないとはいえ,実質的には,そこでメディアと思惟の関係にかんする問題が論じられていたと解釈できる”[29]（p.106）と指摘する.

門部が着目するように[29]（p.106），この論文の最初の方で中井は，言葉が単に意味を担う媒体であるとする見方を否定し，“それが単なる壺であったのではなくして酒でもあった”[1](p.216)と述べ[30]，レトリックに着目する必要性を示唆する．言葉に対して，意味のみを伝えるメディアの機能としてのみ把握するのではなく，意味を担うレトリックとして併せ見る必要性が唱えられる．その上でこの論文は，「話されたる言葉」「書かれたる言葉」「印刷された言葉」という章句を用い[31]，意味を伝えるメディア性よりは言葉を載せる乗り物としてのメディアの区分の方に着目する（[32][33]）[34].

“ブチャーは『ギリシア天才の諸相』において「話されたる言葉」から「書かれた言葉」への過渡は，「書かれた言葉」から「印刷された言葉」への過渡よりも，想像力にとっていっそう驚くべきことであり，その意味においていっそう革命的であったとのべている”[1]（p.217）.

いわば「印刷された言葉」を「書かれた言葉」の延長上に捉え，これら両者の差よりも「話された言葉」と「書かれた言葉」の差の方を大きく見積もる見解を中井は肯定的に紹介する.

以下，晦渋な「言語」の議論を概観する.

この論文では以下に見るように外なる言葉と内なる言葉の対比が[35]，上記「話された言葉」等メディアの分類に重ね合わせられる.

ギリシア時代，文字は“ポイニケーの符牒”[1]（p.217），つまりバルバロイであるフェニキア人の発明した記号として蔑まれた．問答としての古代弁証法では「話されたる言葉」が重視され，それを単に写しとった「書かれたる言葉」は軽視された．ギリシア時代，他者に語る外なる言葉と自分に語る内なる言葉は，この「話されたる言葉」において融和していた[1]（p.223）．声高く考え，論敵と討論するように自分自身とも討論していた[1]（p.218）．以上のことは，アリストテレスが弁証法と修辞学を思惟の合唱者であると考えたことに[1]（p.223），典型的に示される（[36][37]）[38]という.

このように内なる言葉と外なる言葉が一体化していた時代，基本的に弁証法と修辞学に乖離はなく，双方の協力が求められた[1]（p.223）とされる．古代弁証法は修辞・雄弁の基になる問答（法）であると同時に，当時の論理（学）である[39]．問答としては修辞によって相手を説得する動機のある外なる言葉であり，同時に論理としては，自分を納得させる思惟，内なる言葉でもあった（[40][41]）[42].

ところが中世になり，ギリシア時代弟子との問答に使われた閑暇が神との対話に用いられ，羊皮紙に「書かれたる言葉」が重視される．弁証法的討論よりも個人の神への語りかけが尊ばれる.

「印刷された言葉」の時代である近代に至り，弁証法が復活する．ただし外に向けられた討論の要素を消し，ヘーゲル弁証法のように内に向けられた論理学となる．要するに外なる言葉であった弁証法の内なる言葉への転生であり[1]（p.227），修辞学と弁証法（論理学）の分離である．「弁舌」すなわち修辞学と「思惟」すなわち論理とが，外なる言葉と内なる言葉として，近代，完全に分離し，自己の内なる他者が意識される.

この「言語」は，「書かれたる言葉」の外なる言葉と内なる言葉の分離，弁舌・修辞と思惟との分裂をあ

る意味で強化したものとして，「印刷された言葉」を捉える．印刷物はあくまでも分裂を強めたもの，疎外されたものである．「話されたる言葉」こそが，修辞学と論理学の一体性を示す本来の「言葉」であると認識される．さらに「印刷された言葉」が支えるヘーゲル弁証法は，上述の状況へのある種の抵抗として，外なる言葉を内なる言葉が取り込むことを試み，結果として自己の内なる他者に着目し，外と内との「中間者」として自己を定位する[1]（p.245-246）（[43]）[44].

このような修辞学の重要性への着目は，本節冒頭で引いた，「単なる壺であったのではなくして酒でもあった」という，言葉を単なるメディアと考えずとも，それ自体でメッセージ性をもつとする，「言語」のはじめの方の発言にも通じる．

このように「話されたる言葉」と「書かれたる言葉」の関係を，延長・発展させたものとして「話されたる言葉」と「印刷されたる言葉」との関係を捉える「言語」ではあるが，では「委員会の論理」はどうであろうか．次に見たい．なお本節の纏めとしては上記の「印刷されたる言葉」の位置づけを確認すると共に，中井「言語」が修辞学と論理学の一致点を探った点も併せて確かめたい．

1.2「委員会の論理」（1936）でのコミュニケーションの双方向性と印刷メディア

「委員会の論理」は「言語」と似た章句を多くもつにも拘わらず，「言語」の「印刷されたる言葉」に相当する，「委員会の論理」の「印刷される論理」は，「言語」のそれと様相を大きく異にする．

要するに「言語」の「印刷されたる言葉」は「書かれたる言葉」の要素を拡大・強化したものでしかないのに対して，「委員会の論理」の「印刷される論理」は「書かれる論理」の延長にはない．断絶がある．その面での両論文の違いを強調する点，本稿は[26]（p.133）と違う（[45]）[46].

まず「委員会の論理」の「いわれる論理」「書かれる論理」の説明は「言語」の「話されたる言葉」「書かれたる言葉」に近い点から確認しよう．

「いわれる論理」はギリシアの弁証法を念頭に置いた双方向の討論に相当する論理である．一方「書かれる論理」は中世修道院の専有物である．羊皮紙に書かれた言葉はメディアの稀少性と聖書の独占的解釈権とを根拠に，一義的解釈を人々に強要する[2]（p.15）[1]（p.52）．要するに一方向のコミュニケーションを想定した論理である．

ところが近代印刷術の発展に伴い発生する「印刷される論理」は「言語」の「印刷されたる言葉」とは違う．そこでは「いわれる論理」にあった，コミュニケーションの双方向性の復活が強調される．確かに一つ一つの印刷物は一方向的なメディアである．しかしそれは羊皮紙に書かれた書物とは違い，多様な解釈を容認する．印刷本は書き言葉で記されると同時に，大量頒布される．相互討論の機会も開かれる．要するに印刷物の言葉は「話されたる言葉」の可能性を内に孕んだ「書かれたる言葉」である．

この間の事情を次のように記す．

“ここではすでに，「いわれる論理」「書かれる論理」に対しては，「印刷される論理」が生じつつあるのである．印刷のもつものは，タルドが示すごとく，publicum の出現である．ここでは言語意味は，すでに一義的な意味志向が許されなくして，活字となって公衆の中に言葉が手わたしされる時，すでに公衆のおのおのの生活経験とおのおのの異なった周囲の情勢にしたがって解釈される可能の自由が与えられるのである”[2]（p.17）[1](p.53).

双方向性をもつメディアとして印刷物は捉えられる．その点で「言語」とは違う．前著と区別する意味もあり「委員会の論理」では「印刷される論理」と表記された可能性がある．あるいは「印刷される言葉」

とせず「印刷される論理」と表わすことで，メディアに適ったコミュニケーションの様式と論理を併せ見る企図を示したのかも知れない．

例えば後藤和彦の次の発言はその二重性を汲みとっている．“中井に特徴的なことは，このコミュニケーション・メディアの特性を，その時代のリーズニングのタイプと対応させるところにある”[47](p.224)（[48]）[49].

「言語」では論理学と修辞学が一体であるか否かの議論が前面に出たが，「委員会の論理」ではその議論そのものは後景に退く[43]．代わりにこの双方向か一方向かの話が前景に出る．

以上のことは中井のメディア実践とも関係する.「委員会の論理」連載の半年ほど後，中井は『京都スタヂオ通信』の権利を引き継ぎ，1936 年 7 月より隔週刊新聞『土曜日』を創刊し，事実上主宰する．同紙は読者の投稿で主な紙面を形作り，京阪神地区の喫茶店に頒布し，店の客を読者層とした．先に 4 段落前に引いた中井の文章に出てくるタルドの公衆は新聞・雑誌を読み政治的意見を醸成する人々で，フランス全土に散在した．他方『土曜日』読者にはもう少し顔の見える関係があった．しかも「委員会の論理」を掲載した同人誌『世界文化』も，中井が事実上主宰していた．この雑誌の同人は毎月，掲載論文についての合評会を開き，激論を闘わせた．顔の見える関係で印刷メディアの内容を話し合った（[51]）[52].

中井「言語」並びに「委員会の論理」と三木「解釈学と修辞学」を久野の指摘に基づき比較する準備作業として，本章では中井自身の「言語」と「委員会の論理」を比較し，その断層を指摘した．そこで次章で山田の示唆する方向を深める前提として，中井の「機能概念の美学への寄与」と「委員会の論理」を較べる．

2.実体概念と機能概念

2.1「機能概念の美学への寄与」（1930）において

『哲学研究』第 15 巻 11 号所収の「機能概念の美学への寄与」（1930）で中井は，カッシーラーに依拠して，実体概念と機能概念とを対比させる．

実体概念とはプラトンのイデア論でいうイデアをその典型とする．花ならそれぞれの花固有の記憶表象を我々はもつが，それらの記憶を忘れることで花の抽象的な概念が生じる．

“カッシーラーは皮肉を含んでいう．すなわち「忘却という天恵の事実が概念構成の基礎となる」”[1]（p.163-164）．忘却が不完全だと例えば花それぞれの記憶が残る．花の概念が個々の花の特徴を越えた概念として構成されるのを，記憶が妨げる．

結局この実体概念は“抽象的に個々の性質の消却によって”[1]（p.164）作り上げられる．あれでもないこれでもないと，否定を重ね合わせて実体概念はできる．

では反対に積極的な概念はどうなるのか.

“金属の概念には赤でもない黄でもないまた特殊の比重を持っていないという表象だけではたりない．むしろ，積極的に何らかの比重，あるいは硬さを有し，何らかの色をもっているという考えかたがあるべきである”[1]（p.164）.

この積極性を推し進めると機能概念に至る．実体概念は個々のもののもつあれこれの特性を消していく，消極性の下に成立する．反対に積極性を示すなら，記憶に頼らず個々の特徴の複合を決定させるもの，すなわち機能で概念を構成すれば良い.

“その論理は形式論理のごとく，ああでもないこうでもないと，個々の特徴を捨て去って，ついに抽象的な「あるもの」にまでもたらされる忘却されたる記憶心象によるのではなく，まずすべての個々の特徴をもって，一つの関係を決定しているところの，複合的要素を全体のすがたをもって捉えようとする函数的関係

がそこに要求される”[1]（p.171）.

例えば実体概念の「窓」は，“忘却を通じての抽象化，すなわちその漠然たる一般的表象”[1]（p.174）によって，作られる．他方機能概念の「窓」は，“照明，通風，展望度の三つの要素の複合としての構成体であることを示す”[1]（p.174）．この三つの要素の複合の比重によって異なったタイプの窓，すなわち“特殊の類型を生じる”［1］（p.174）.

あるいは昨今の「軍艦」は“迅速な艦型の変化”［1］（p.204）を被る．それゆえ現在軍艦の実体概念は構成しづらい．他方機能概念の軍艦は，“攻撃，防御，運搬，居住などの要素の上に構成”［1］（p.205）される．それらの要素の複合のうち攻撃の比重が大きければ戦艦，運搬の要素を増やせば巡洋艦になる.

また機能概念は過去の記憶に頼らない．よって科学技術の発展と結びつく．“例えば，記憶表象としての飛行機は落ちるものであり，そして落ちざる飛行機とは一つの虚偽概念であったのに反して，機能概念をもってするならば，落ちざることはその構成要素の一つである”[1]（p.175-176）．実体概念は個々の記憶を消すことで成立すると先ほど記した．だが，個別の特徴を捨象しつつその概念の過去の記憶を重ねてはじめて成立する点で，結局記憶表象に頼り共通項が残る．抽象化されていても過去の記憶に頼る点で，実体概念の飛行機は落ちる．「記憶表象としての飛行機は落ちるものであ」る．“それが落ちることは，繰り返さるる悲しい失敗の連続である”[1]（p.176）.

他方機能概念を用いれば落ちない飛行機も構想しうる.

“その（落ちることの）消去こそが飛行機の概念構造である．多くの論理書において，虚偽概念の引例は，死せざるソクラテスと飛ぶ風船であった．しかしその虚偽概念こそが医術の理念であり，機械の夢である”[1]（p.176）〔（ ）は本稿で補記〕[53].

このように「機能概念の美学への寄与」では，機能概念の議論の延長上に，未来を構想する技術への信頼が表明される．他方次節に見る「委員会の論理」では，そうともいえない面がまずは前景に出る.

2.2「委員会の論理」における機能概念，虚偽概念と方向性の議論

「委員会の論理」でもこの論理書での虚偽概念に論及する．この議論を手がかりに本節では，双方向性の問題を 1.2 より広い文脈から考える.

“例えば，かつてあらゆる論理書で虚偽の概念として，**航行する風船**がその例証に用いられていた．それは非現実的な概念であった．しかし，今やツェッペリンは現実の概念となって世界を一周したのである”[1]（p.87）[2]（p.52）〔なお太字は原テキスト．以下同様〕.

「機能概念の美学への寄与」では虚偽概念が嘘でなくなる可能性を示すに留まったが，ここでは現実に嘘でなくなる例を示す．その限りでこちらの方が技術に楽天的な印象もある.

ただし虚偽概念を虚偽でなくすのに，手をこまねいて眺めていれば済むのではない．続けていう．“この**非現実の概念を現実の概念**に転換するところには，そこに方向の緊張がある”［1］（p.87）[2]（p.52）.

「方向の緊張」とは何か．人は死に向かう．水は低きに流れる．自然界の万物は一定の方向に進む．他方宿命とでもいうべき自然のさし示す流れに抗して自らの望む方向に転換できるのが，人間である．“自然の論理が一方向的であり，直流的であるならば，技術の論理は相互転換的であり，交流的である”［1］（p.87）[2]（p.52）．ここでいう「相互転換的」とは，単に自然に対する技術の示す方向の自由をそう表すのみではない．次に見るように，「印刷される論理」同様，コミュニケーションの双方向性も含意する.

自然と人との方向転換だけではない，人と人との方

向転換もある．「印刷される論理」の場合，書き手と読み手の双方向性が問われたが，技術の場合，技術者と利用者・大衆との双方向性が問題となる．直接にはメディアの問題ではなく商品の問題である．だが結局，コミュニケーションの双方向性に議論は収斂する．

煩瑣になるが詳細を少し追う．

「委員会の論理」の今見た少し前の部分では，技術の成果に否定的な記述がなされるし，機能概念についても同様である[54]．科学哲学者アッケルマン，カルナップによって“論理の函数化” [1](p.64) [2]（p.28）がなされたと述べた上で，“それは「機能の論理」であり，「数の論理」である” [1](p.65) [2]（p.29）と続ける（[55]）[56]．この時代を帝国主義的な経済段階にあると捉え，“生活の隅々まで高度の数学の要求さるる” [1](p.65)[2] (p.29) 重工業的生産体制により，人々も生産物も出発点とは異なったものに導かれると記す．その上で，“概念の世界では，論理は記憶的集合の総合を脱して，函数的エレメントの複合構造” [1](p.65) [2]（p.29）へと転化すると語る．「函数」のドイツ語 Funktion は「機能」をも意味するので[57]，機能概念も帝国主義的経済段階の疎外の一つと理解できる．機能概念が高度の数学を解する専門家に左右されていると，中井はここでは認識している．その点で「機能概念の美学への寄与」とは違い，技術を楽観視しない．

続けて述べる．“そこで起こってくることは，論理の一般大衆からの分離である” [1](p.65) [2]（p.29）．

論理は大衆ではなく専門家がもっぱら担う．

“そこで高度の科学技術の創りだす物の概念の決定にあたっても，その一般的函数的概念をもっているのは専門的技術者だけであって，一般大衆はただその記憶表象のみをもっているので，厳密な意味での一般性は，大衆から疎外されるような構造をもってきたのである” [1](p.65) [2]（p.29）．

この引用文で「函数的概念」と「記憶表象」の対比がなされる．前者は専門的技術者，後者は一般大衆が担う．「函数」は Funktion で，専門家の論理を支えると同時に先述のように「機能」も意味する．他方 2.1 での「機能概念の美学への寄与」の説明からも「記憶表象」は「実体概念」に随伴する．

よって前々段落の文は，大衆が実体概念，表象しか与えられず，機能概念は専門的技術者が独占すると読みとりうる．

“いわば大衆は，その生産物に対して，その一般概念から疎外されてただ表象のみをもつ，というような矛盾の中に転化放置されるにいたるのである” [1](p.65-66) [2]（p.29-30）．そもそも現代論理学が函数化していて，その背景に“論理そのもの”の“無方向な函数化” [1](p.66) [2]（p.31）の現状がある．その点でまずは専門家自身が商品社会の中，大きな文脈で無方向である．同時に，それでも彼らは商品の方向性を，歪みをもちつつも，自分なりに示せるが，大衆の方は方向性の議論から終始排除され，「矛盾の中に転化放置され」る．

この専門家の定めた方向性を変えるのに役立つのが，双方向の議論である[58]．

ここで「方向性」という言葉の「方向」と「双方向性」という言葉の「方向」を同じ概念として了解すれば，中井の真意は一層汲みとれる（[59]）[60]．商品それぞれの機能は，我々大衆が議論して決めれば良い．大衆がこれからの商品開発の方向を決め，今ある商品の使い方も決める．それは「印刷される論理」が本というメディア（これも一つの商品でありうる）に対する解釈の自由を我々大衆にもたらすのと同様である．

そしてそのことは制度についても妥当する．商品を生み出す技術の場合，専門的技術者と大衆の双方向性が問われた．制度を創り運用する政治行政分野であれば，政治家ないしは官僚と大衆の双方向性が問われる．「委員会の論理」ではこれらを“審議性”と“代表性” [1](p.103) [2]（p.68）の言葉で表わす．

このように「委員会の論理」は「機能概念の美学への寄与」とは異なり，機能概念をそのまま実体概念よりも肯定的に評する途は選ばず，帝国主義的生産体制の下での機能概念による人々の疎外を，まずは否定的に描く．その上でコミュニケーションの双方向性の実現でその状況を克服する戦略を探る．その場合過去の記憶に縛られず方向を新たに問いうる機能概念は，方向の決定の閉鎖性をうち破る点で，広い意味で肯定される．

しかもここで詳細触れないが，そこに嘘言の媒介の議論が絡む．羊皮紙という稀少なメディアに書かれた言葉は神の言葉がそうであるように真理である．真理は討論の可能性が開かれない．印刷物というメディアに記された言葉は平準化され嘘言の可能性を孕む．それだけに問いが双方向に開かれる（[61][62]）[63]．それと同様，商品は利潤を目的に作られ方向が歪む．歪むが故にその修復の機会も開かれる[64]．

このように「委員会の論理」は商品としての印刷メディアが人々に疎外をもたらすとしつつ，方向性の転換でその状況を乗り越えようとする．その点，印刷メディアの否定的側面のみを把握する「言語」の印刷メディア理解とは違う．さらに専門家が独占してきた商品の方向性の決定権を大衆に取り戻させる点で，技術を含めた美学領域に議論を局限した「機能概念の美学への寄与」とも異なる．ただし「言語」の「話されたる言葉」に相当する「いわれる論理」の双方向性が，「印刷される論理」において拡大強化され復活する見通しを示す．その限りでは論文「言語」の「話されたる言葉」重視の考え方は貫かれる．

そこで中井と三木を比較するため，3. で三木の「解釈学と修辞学」を中井「言語」と対比して検討し，4. で三木の「書かれた言葉」「言われた言葉」を見ていき，三木と「委員会の論理」を較べる．

3.三木清の「解釈学と修辞学」

三木清の「解釈学と修辞学」（1938）は，本稿「はじめに」で引いた久野の文章で，中井「言語」に触発された論攷とされる[15]（p.116）．他方この文章を収録した『三木清全集第５巻』の「後記」で，久野はこの論文と中井「委員会の論理」の関係にやや別のニュアンスで論及する．

“ギリシャ哲学において，真理認識のオルガノンとしての論理学と無縁であった思想説得のアルスとしてのレトリックの意味をもう一度，考えなおし，むしろレトリックを著者（三木）の考える“主体的真実”の表現の論理学として組みなおそうとする著者の野心は，実践の論理学の前途に大きな展望をきりひらいている．

こうして著者の後輩，中井正一の「委員会の論理」が予想している前提の一つが，著者によって解明の手がかりを提供されるという結果が生じるのである．認識の論理とレトリックの論理の合成作業によって，実践主体間の連帯と協力の論理が開示され，この開示の上に「委員会の論理」ははじめてビュロクラシーをこえる基礎をもちうるのである”[65]（p.428）〔（ ）は本稿記〕（[66][67]）[68]．

しかし 1.1 で見たがそもそも中井「言語」がすでに「認識の論理とレトリックの論理の合成」，つまり認識の論理としての弁証法と修辞学との一体化を志向した．その限りで上記久野[65]の第３文は不適切である．ここは久野[15]の本稿本文で見た文章のように，中井から三木への影響の方のみを捉えるのが妥当である．ただし中井の「言語」や「委員会の論理」の観点が[65]の第１文の「“主体的真実”の表現の論理学」まで貫かれているか否かは別で，その点も検討する．

1.1 で確認したが，中井「言語」は論理学と修辞学が本来不可分で，古代弁証法において結びつくと語る．三木の「解釈学と修辞学」でも終わりの方で次のように記される．“即ち修辞学の論理は弁証法である”[23]

（p.154）.

この「即ち修辞学の論理は弁証法である」という文章までは，この論文で両者の関係は緊密でありつつ少し距離のあることを示す表現が採られた. 例えば,“プラトンが考へたやうに修辞学の根底には論理がなければならず，アリストテレスが云つたやうに修辞学は弁証論の孫である” [23]（p.149）というように（[69]）[70].

三木の場合，両者の違いをまずは以下のように意識するため，上の引用で「根底」とか「孫」と記される. “論理的思考が対象的に限定された思考であるに反して，修辞学的思考は主体的に限定された思考である. 前者が真理性（Wahrheit）に関はるに反して，後者は真実性（Wahrhaftigkeit）に関はる” [23]（p.148）.

真理は普遍性を目指し, 誰にも妥当する. しかし個々人は個性をもつ. 個性的な人々を発見する際知るのは真理ではなく真実である[71]. パスカルの言に依拠して三木は語る. “一冊の書物を読んで，ひとりの著者ではなくひとりの人間を見出すとき，我々の悦びは大きい” [23]（p.148）.

個性と真実性が結びつく. そして三木は真理性と真実性とを峻別する. 前者が論理学に，後者が修辞学に通じる. “修辞学は単に論理的ではなくてまた倫理的であり，その証明は倫理的証明を含むと云ふことができる. かやうな証明の要素は真実性である” [23]（p.152）. 修辞学による証明は真実性によるもの，倫理的なもので，論理による証明とは一線を画す.

よって三木は論理学と修辞学とを本来別物とし，弁証法において初めて双方が一致するという見方を採る. したがって上述のように論文の終わりに至ってようやく「即ち修辞学の論理は弁証法である」と語る[72].

三木後半生のライトモチーフであるパトスとロゴスの弁証法も, 修辞学により主体的真実性を確保しつつ，それを論理（学）に一致させる文脈から捉えられる.

中井「言語」の場合，この真理性と真実性の対比の記述はない[73]. “集団的主体”[74]（p.215）を唱えたとされる中井は，その限りで個性，独創性を志向する三木とやや隔たりがある（[75][76]）[77]. 久野のいう「“主体的真実”の表現の論理学」は三木では明確だが，中井では三木ほど明らかではない[78].

この真実性と真理性との距離を意識するか否かは機能概念に対する二人の態度の違いとも関連するので，5. でその点を論じる. その前に次章 4. では中井の「言語」「委員会の論理」で示された「話されたる言葉」「書かれたる言葉」あるいは「いわれる論理」「書かれる論理」等の，言葉を伝え論理を支えるメディアの分類が，三木の他の著述でどう扱われるかを見よう.

4. 三木における「話される言葉」「書かれる言葉」と印刷メディア

三木の小文「雄弁術の復興」（1939）では政治が大衆と結びつく際，雄弁術が必要であると語る. 特にファシズムが雄弁術を重視する独伊に対して，日本の場合官僚制が強く，これら同盟国と対等になるか疑問であると述べた上で次のように語る. “文学的或ひは哲学的に考へても，雄弁術即ちギリシア人がレートリケー（レトリック）といつたものは，今後の重要な興味ある問題を提供してゐる. そこには一般に書かれた言葉に対する話された言葉の問題がある”[79]（p.375）[80].

ここでの三木は中井「言語」の「書かれたる言葉」「話されたる言葉」に相当する「書かれた言葉」「話された言葉」という表現を用いる. しかも後者を修辞学（雄弁術）に結びつける. しかしここには，中井「印刷される論理」が時代的に先行する二つの論理を止揚し，その性格を併せもつ二重性はない.

「フレッシュマン」（1935）では大学の講義と印刷術とを対比する. “印刷術の発達は大学の意義を失は

せると云ふ者がある．だがさうではない．多数の人間が集合することによつて作られる知的雰囲気の中に入り，思想を交換するといふことは有益である．話される言葉は書かれた書物とは違つた多くのものを与へる．人間的な接触，談話の価値は極めて大きい”[81]（p.13）．

ここにも「話されたる言葉」と「書かれた言葉（書物）」の対比がある．しかし中井「印刷される論理」のような，書き言葉が「話された言葉」を胚胎し，小集団での対話を萌芽させるという逆説がない．次のように続ける．“しかし今日の大学の実際では，教師と学生との接触，談話は稀なこととなり，書物の代わり得ない部分は少なくなつてゐる” [81]（p.13）．

「与論の本質とその実力」（1937）では“与論の基礎は話される批評である”[79]（p.141）と記される．話される批評と新聞雑誌との関連に及ぶ．“与論は話される批評を基礎とするにしても，もとより凡ての人はあらゆる場合，あらゆる問題について直接話し合ひ得るものではない．それ故に意見の媒介の機関として新聞雑誌の如きものが必要なのである”[79] (p.142)．

新聞雑誌を肯定的に評する点で中井の「印刷される論理」に近い響きもある．ただし新聞雑誌を代替手段以上に評価せず，タルドのような散在的公衆を念頭に置く点で，中井と違う．

結局三木が中井同様，「話された言葉」「書かれた言葉」という，言葉を載せるメディアの対立を意識した点は確認される．しかも中井「言語」及び三木「解釈学と修辞学」で示された，修辞（学）と論理（学）との一致点を探る主張と，以上の「話された言葉」の重視は重なる．ただし「委員会の論理」の「印刷される論理」の逆説がない．

1．にて先述のように日頃書き手として三木の接する印刷メディアは岩波書店を中心とした商業出版社のものである．他方中井は同人誌『世界文化』，喫茶店に置く隔週刊新聞『土曜日』という，商業ベースに乗らない印刷メディアの活動をした．この違いが印刷メディアへの両者の評価の差に現れる．

以上本章は三木の「話された言葉」「書かれた言葉」と中井「委員会の論理」との関連を考察した．次に山田の示唆を検証すべく，中井と三木の機能概念を比べる．

5. 機能概念に対する三木と中井と顔の見える関係

三木の『人生論ノート』の「人間の条件について」（1939）を見よう．

“古代は実体概念によって思考し，近代は関係概念或いは機能概念（函数概念）によって思考した”[24](p.257) [25]（p.61）．ここまでは中井やカッシーラーと同じ状況認識である．しかし続けて次のように述べる．“新しい思考は形の思考でなければならぬ”[25]（p.61）[24](p.257)．「形」とは，実体概念と機能概念，“両者のいわば綜合である” [24](p.257) [25]（p.61）．[82]

この点で中井とやや違う方角を三木は向く[83]．だが続けて記す一連の描写は「委員会の論理」と状況認識を共有する．

まず三木の訳したマルクス&エンゲルス『ドイッチェ・イデオロギー』（邦訳 1930）の「交通」概念に似た記述がなされる．“以前の人間は限定された世界のうちに生活していた．その住む地域は端から端まで見通しのできるものであった”[24](p.257) [25] (p.61)．

「交通」の未発達な自給自足の世界では，顔の見える関係が築ける．顔が見えれば形もはっきりする．道具や技術，知識の出所由来が明確になる．“このように彼の生活条件，彼の環境が限定されたものであったところから，従って形の見えるものであったところから，人間自身も，その精神においても，その表情においても，その風貌においても，はっきりした形のあるものであった” [24](p.258) [25]（p.61）．3 段落前で

見た「形の思考」も，「表情」や「風貌」すなわち顔の見える点で「形のあるもの」に関係する．

他方交通の発達した現代，人間の条件は異なる．“私は私の使っている道具が何処の何某の作ったものであるか知らないし，私が拠り所にしている報道や知識も何処の何某から出たものであるかを知らない”[24](p.258) [25]（p.61）．交通の発達，交換の促進による匿名性を難じる．「委員会の論理」に近い．

というのも 1.2 と 2.2 で見たが大衆は商品の表象のみ与えられ，その機能，方向の決定権は“工場の**秘密委員会**”[1]（p.98）[2]（p.63）が握る．よって顔の見える関係で改めて大衆自らが方向性を問い，討論し合うというのが中井の主張の骨子であったからである．

基本的に顔の見えない無限定性が世界を支配し形が見失われがちである中，いかに形を見いだすかが課題であると三木は述べる．

その際“科学を超えた芸術的ともいうべき形成”[24](p.259) [25]（p.62） が要請される．あるいはカント『判断力批判』に多くを依拠した三木『構想力の論理』から引くと，“構想力の論理を美の領域への拘束から解放して広く行為の世界へ導き入れると共に，それを歴史的創造の論理として明かにする”[13]（p.18）ことで解決しようとする（[84][85]）[86].

その点美学者中井よりも処方箋が美学寄りに響く（[87]）[88]．他方中井は民主的討論でこの無限定な状況を乗り越えようとする．商品や制度やメディアの機能の最初の決定権を我々大衆はもち合わせないが，それぞれの機能を小集団にて読み替える権利をもつというのが，中井の民主的討論の有効性の根拠である．例えば中井の発言を敷衍すると，花壇の枠として設計されたものも人々の話し合いの結果次第では椅子と読み替え，自分らなりの機能で捉え，その枠に腰かけることも可能となる．

三木も「アリストテレス」（1938）で語る．“専門家はただ彼と同様の者によつてのみ評価されうるといふ専門家の要求を，アリストテレスは種々の仕方で斥けた．彼は云ふ，多くの技術的仕事に於て，最もよく判断し得るのはそれを作つた人でなく，その技術を有しない者もそれに就いて理解を有する．例えば家に就いてそれを建てた者のみが判断し得るのでなく，寧ろその家に住む者が一層よく判断する”[89]（p.234）．

ここには共通感覚（sensus communis）と，今まで本稿で論じてきた「双方向性」の意味での方向性（sens）の問題が介在する（[90][91][92][93][94][95][96]）[97].

この文章を，単に評価主体の方向のレベルだけでなく使い方という評価・解釈の内容のレベルでも，作り手より利用者に判断力があると解すると，「委員会の論理」に近づく．しかもそのことは，カント『判断力批判』を受け手，鑑賞者のための議論から，送り手，創作者のための議論へと読み替えようとする三木『構想力の論理』の趣旨にも適う（[98]）[99]．というのもこの創作者を一般大衆と解するならば，『構想力の論理』は，コミュニケーションの双方向性を唱えることになるからである．『構想力の論理』と「委員会の論理」は相互に近づく[100].

とはいえ中井は三木に較べ機能概念志向が強い．そのような中井は集団主義に，機能概念への躊躇を示す三木は個性志向に，親和性がある．しかも個性志向がある三木は，3．にて先述のように中井に較べ，真理性以上に真実性を求める志向が表に出る．この差の部分が，その言の妥当性はともあれ久野が三木「解釈学と修辞学」によって「委員会の論理」の官僚制的な限界が越えられると述べた部分に，照応する．

6. 結論と今後の展望－『構想力の論理』「委員会の論理」と中井，三木

本稿は以下のように纏められる．

久野収は中井の論文「言語」が三木に影響を与え，三木「解釈学と修辞学」が記されたとする．また同じ久野が別の文章で，中井の「委員会の論理」は三木「解釈学と修辞学」により初めて議論の官僚制的側面を免れると指摘する[101]．さらに山田宗睦は中井の実体概念に対する機能概念の捉え方が，三木の『構想力の論理』に影響を与えたと指摘する．

本稿はこれら先達の示唆的発言を踏まえ，三木と中井の関係を彼らのテキストの比較を通じて確かめたが，まずその前提として「委員会の論理」と中井のそれに先行する 2 著作との関連に論及した[102]．

2 著作のうち第一に中井「言語」と「委員会の論理」との関係を見た．「言語」の「印刷されたる言葉」は「書かれた言葉」の延長に位置づけられる．他方「委員会の論理」の「印刷される論理」は「書かれる論理」との間に断層がある．その裂け目に中井はコミュニケーションの双方向性への希望を託したと本稿は考える．

第二に中井「機能概念の美学への寄与」と「委員会の論理」の機能概念の違いを検証した．「機能概念の美学への寄与」では機能概念が実体概念よりも優れると記されるが，「委員会の論理」では「論理の函数化」など機能概念による個人の疎外が指摘される．その上で企業あるいは官庁の専門家による機能概念の独占を双方向的討論により打破し，機能を問う形で大衆が商品や制度の方向を決める可能性を中井は示し，当初の機能概念への否定的見解を乗り越えていると本稿は理解した．

これら確認作業を踏まえ，中井「言語」と三木「解釈学と修辞学」とを比較し，中井から三木への影響を確かめた．具体的には弁証法論理学と修辞学とが不可分という中井「言語」の指摘を三木「解釈学と修辞学」は受け継ぐ．しかし三木にはその二つが本来切れているという認識が強くある[103]．また論理学が真理性に，修辞学が真実性に関係し，両者を峻別する視点は，三木にあって中井でははっきりしない[104]．

さらに中井の「話されたる言葉」「書かれたる言葉」に類似した表現が，三木の他の著述でどう記されるかを検証した．そこで中井「言語」と同じ問題枠組みで語られているものの，「委員会の論理」の「印刷される論理」の逆説性が，三木にないことが確認された．

加えて「委員会の論理」等の実体概念，機能概念の記述に関して三木の著述でそれらへの言及はあるが，中井に較べ機能概念の否定的側面，形のなさへの懸念が前景に出る．そのことが顔の見える関係の志向へと通じる．いいかえると真理性よりも真実性を求める方向に進む．

つまり「言語」と「解釈学と修辞学」での中井と三木の差の部分が，「委員会の論理」に関して久野が三木によってその限界が越えられると示唆した部分に呼応する．この真理性と真実性の峻別の問題が三木の『構想力の論理』へと繋がる[105]．

しかしまた 5．の最後の方（並びに[99]）に記したように，『構想力の論理』がカント美学を鑑賞者の議論から創作者の議論へと読み替えた点は，その創作者が一般大衆である限りで，「委員会の論理」同様の双方向のコミュニケーションを三木が志向した証と理解できる．また中井の場合も真理性と真実性の矛盾がなくなるか否かの問題は，両者を繋ぐ領域としての美や感情への関心として常に意識されていた[106]．

以上が本稿の纏めである．

京大哲学科の後輩中井から三木への影響について彼ら二人の後輩久野や山田の示唆があるが，テキストの比較を通じて証した研究はない．よって本稿はその作業により『構想力の論理』の著者である三木と中井「委員会の論理」の共通する鉱脈を示した．新たな形を構想し，その形が未定型であるため，その形についての議論を双方向のコミュニケーションの対象とし，それを危機の時代の処方箋とした点で，三木と中井は戦術を共有していた．

次に今後の展望を示すため議論の展開を若干図る．

本稿「はじめに」で引いた山田[16]は三木の「構想的知性」が，過去の実体物から離れて将来を見通す機能概念で物事を捉えることを目指すが，それは中井からの影響であると指摘する．

確かに三木の形は，5．で見た通り実体概念の全否定ではない．機能概念と実体概念の総合から生ずる．「委員会の論理」で中井が機能概念に否定的に論及した箇所でも疎外が示唆されたが，論理だけの世界は匿名性が支配する．そこで存在の真実性を取り戻すには「顔」つまり個性の成立ないしは回復が必要である．「顔」を取り戻すことは，具体的には形，いいかえると実体概念の,機能概念とそれとが総合されながらの,復活によってなされる[107].

しかし具体的な形を備える点で三木の実体概念は中井のそれとやや違う．2.1 で確認したが「機能概念の美学への寄与」を見る限り中井の実体概念は抽象的で,個々の過去の記憶の共通項に頼りつつも，具体物の影を消していく．その点で上記の山田の言は素直には受け入れがたい．

だが三木の構想力は過去に向かわず未来を見据える. 山田[16](p.32)のいうように,「追考的弁証法」[108]を乗り越えた「構想力の論理」は，過去の記憶への依存から脱却する必要がある．その点では基本的に機能概念を志向するはずである．5．にて先述のように互いの顔が見えるようにするため三木の場合，実体概念により傾くが，以上の点から 5．の第２段落で三木自身も語っているように，機能概念との総合が志向されなければ整合性を欠く．

この間の事情を逆に三木の立場から穿った見方で記せば，中井が「言語」で修辞学と論理（学）との一体化を唱えつつ,実体概念より機能概念をと唱えるのは,やや矛盾することになる．そのことは本章冒頭で述べた[15]と[65]の間の久野の矛盾にも符合する．

ただし中井の立場からすると，「印刷される論理」の二重性が，この匿名性と個性的個人の矛盾を乗り越える方途となる．印刷物というメディアは作者の顔が見えない点で匿名かつ一方向的である．だが，一方的に大量頒布されても 1.2 や 2.2 で見たように各々のサークルメンバーが顔の見える関係で双方向の読書会を開けば，多様な解釈も可能となる．それと同様，方向の決定権の我々にない，利潤機構や官僚機構が作った商品や制度の新たな方向，機能について顔の見える状態で双方向の討論に参加すれば，無方向性は乗り越えうる．これらは想像上の三木からの批判に対する中井の再反論になろう．

以上本稿では，三木への中井からの影響を考えつつ二人の違う点を見つめ，そのことでメディア論の古典「委員会の論理」の独自な点を，中井の先行する論文並びに三木「解釈学と修辞学」等との比較から，従前以上に明確にした．

なお本稿では中井から三木への影響を考察したが，根底に三木から中井への影響がある．その最大のものは共通感覚論と，それに基づく異質なものに飛び込む媒介，ミッテルの媒介である[109]．よって「委員会の論理」のメディア論としての理解は，三木との関係をより明らかにして深まる．

今後の具体的課題として，三木『構想力の論理』を，双方向的討論によって機能概念の匿名性を乗り越えるという中井の戦術から読み直すと，どうなるかの検証がある．それは『構想力の論理』を意識しつつメディウム，ミッテル二つの媒介<メディア>概念によって『判断力批判』を読み直そうとした，中井「カントにおける中間者としての構想力」（1949）の理解と併せてなされる必要がある．

またこの三木の「真実性」の考え方から，中井の「委員会の論理」を読み解く作業も必要となる. それは[65]のいう，三木によって中井の「委員会の論理」の弱点を越える試みである（[110][111]）[112].

これらの課題の究明により，三木と中井の媒介<メ

ディア>論の再構築はより深められ，ことに固定性と流動性について等[113], 従来の枠組みが通用しなくなりつつある昨今のメディア環境への有効な視座が開けよう[114].

注・文献

[1] 中井正一．中井正一全集第 1 巻．東京，美術出版社，1981．471p.

[2] 中井正一. 中井正一評論集. 東京, 岩波文庫, 1995. 406p.

[3]後藤嘉宏．中井正一のメディア論．東京，学文社，2005．542p.

[4]稲葉三千男．中井正一の“媒介”論紹介．新聞学評論．18, 1969, p.111-118.

[5]杉山光信．中井正一試論： その言語・映画の理論と弁証法の問題について．東京大学新聞研究所紀要. 23，1975, p.41-91.

[6]江藤文夫，鶴見俊輔，山本明編著．講座コミュニケーション．東京，研究社，全 6 巻．1972-1973.

[7]竹内成明．闊達な愚者：相互性のなかの主体．東京，れんが書房新社，1980．267p.

[8]比較的最近のものでは[3]があり，同書は[4]とそれを批判した[5]の議論に依拠しつつ中井の全生涯を中井独自のメディウム，ミッテル二つの媒介<メディア>概念で捉え，メディウムに支えられたミッテルを中井が晩年志向したと結論づけるが, そこで示された全体像の是非はともあれ, その結論に制約されて「委員会の論理」の媒介<メディア>概念の理解が充分でない．本稿はそのような[3]批判に向けての準備作業である．なお，中井全般のメディア論的理解は鶴見俊輔がその嚆矢であろう．鶴見が編者に名を連ねる[6]では，中井についてのメディア論的論考がいくつも載る．「委員会の論理」に絞ったメディア論的解釈は[7]が過去にある．同書は「委員会の論理」が“論理の自己疎外”[7]（p.190）を難じており，自らの著述そのものも自己否定する姿勢に貫かれると述べる．この[7]は中井の言説をパラフレーズして大局を掴む方法を採る．[7]の「委員会の論理」解釈がこの難解な論文の全般に及ぶのに対して, 本稿は「印刷される論理」4 の意味解釈に焦点を局限しテキストを子細に検討しつつ，全体像については[7]同様中井のテキストをパラフレーズしてそれを射程に入れる方法を採る. なお本稿注[114]で[7]に対する本稿の見解の一部が記される.

[9]門部昌志．中井正一の言語活動論をいかに読むか．長崎県立大学国際情報学部研究紀要．Vol.9，2008, p.115-128.

[10]林達夫ほか．哲学事典．東京，平凡社，1954．1294p．90p.

[11]「媒介」にはメディアに通じる意味以外に弁証法の「媒介」の意味もある．定律と反定律とが関わり合うことが「媒介」となる．詳細は[3]（p.17-21）を参照. 事実を直接受け取るのではなく, その背景や因果関係を問うことで, その事実の本質を明らかにすることが「媒介」である．要するに定律で示された事実を直接受け取るのではなく, 背景を問う反定律を介する（媒介する）ことで，その事実の本質がジンテーゼとして明らかになるという説明が，弁証法の「媒介」に対してなされる．“**媒介**　直接に対する語．われわれに与えられた事実をただそのままに直接受けとって満足するのでなく, その事実の本質をあきらかにすれば，それがしゆじゆの原因や根拠，関係や条件によつてなりたつていることがわかる. この関係などが知られた知識を媒介された知識という. 弁証法は世界がたがいに関連し, 制約しあつている諸事物からなると考える. したがって知識は媒介された知識でなければならないし, 直接的な知識は媒介された知識にすすまなければならない”[10]（p.918）．テーゼとジンテーゼをそれぞれ異なる主体が発しているとすれば, 主体相互のやりとり，コミュニケーションが「媒介」に

なる．その意味で概ねソクラテスの弁証法，問答法は対話による媒介であり，それを一個人の中で成し遂げるのがヘーゲル弁証法となる．

[12]メディウムについて動きがないのに本文で「元来一方向的」と一応動きのある表現をするのに疑問をもつ向きもあろう．少なくともメディウムは固定的であるので自分は変わらない．例えば神は我々から懸絶した存在でその言葉についての論争の外に自らはいる点で，メディウムとしての固定性をもつ．神の言葉を伝える神父は基本は神の固定性を前提として話をするので，動きはあるが一方向的になる．写本は鎖に繋がれた修道院の図書館の本に象徴されるように，固定的で解釈の絶対性をもつ．写本の固定性を人々に媒介する知識人は，動きはあるが，神父同様やはり本の内容である理論を伝える者として一方向的にメッセージを発し，その点で固定的な立場に立つ．よってそれは「媒介」というよりも「媒介物・媒体」とでもいうべきものとなる．またさらに本文で「元来」という表現を加えたのは，このように本来一方向的で対等でないものが，双方向的で対等になる場面もあるからで，それはミッテルとなる．要するに「媒介物」の方から捉えると，固定性の強いものがメディウム，流動性の強いもの「媒介」に近いものがミッテルになる．他方「媒介」の方から捉えると，一方向的なものがメディウムの媒介，双方向的なものがミッテルの媒介となる．さらに一方向性は連続的に一方が話すものでありメディウムの媒介に通じ，双方向性は断絶した双方が語り合うものゆえミッテルであるとも解せる．つまり連続性をもつものはメディウム，断絶をもちつつそれを繋ぐのがミッテルである．本来一方向的に話す神父や知識人に対して民衆が双方向で語りかける場合，この意味で断絶があるもの相互の媒介であって，ミッテルとなる．

[13]三木清. 三木清全集第８巻. 東京, 岩波書店, 1967. 519p.

[14]『構想力の論理』と「委員会の論理」の比較を本稿でも射程に置くが，その準備作業が本稿の本文の範囲で，主に注にて『構想力の論理』との照応関係に触れるに留める．

[15] 久野収．三〇年代の思想家たち．東京，岩波書店，1975．396p

[16]山田宗睦．昭和の精神史：京都学派の精神．京都，人文書院，1975．286p.

[17]鶴見俊輔．源流にいた人．UTPÃDA　場．25，2003，p.3-4.

[18]鶴見俊輔．思想の発酵母胎．思想の科学．第４次第７号，1959，p.30-39.

[19]後藤嘉宏．中井正一と思想の科学研究会に関する研究序説．コミュニケーション科学．No.24，2006，p.125-139.

[20]なお三木，中井，それに中井を自らの“源流の人”と評する[17]（p.3）を併せ，“思想の発酵母胎”[18]（p.30）としての彼らの編集者性を論じた[19]もある．

[21]なお“京大哲学科の機関誌”[15]という表現は実態についてはともあれ，正確さを欠く．少なくとも名目上京都哲学会の学会誌である．

[22]羽仁五郎．図書館の論理：羽仁五郎の発言．東京，日外アソシエーツ，1981．264p.

[23] 三木清. 三木清全集第５巻. 東京, 岩波書店, 1967. 432p.

[24] 三木清. 三木清全集第１巻. 東京, 岩波書店, 1966. 500p.

[25] 三木清．人生論ノート．東京，新潮社，1954．152p.

[26]門部昌志．集団／身体／言語活動．県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要．Vol.7，2006，p.131-144.

[27]後藤嘉宏．三木清の公共圏の構想と中井正一：二人の商業ジャーナリズムへの距離の置き方の違いを軸にして. 図書館情報メディア研究. Vol.4, No.1, 2006, p.1-27.

[28]後藤嘉宏．中井正一の理論にみられる三木清『パスカルにおける人間の研究』（1926）からの影響について．図書館情報メディア研究．Vol.6，No.1，2008，p.27-41.

[29]門部昌志．中井正一における集団的コミュニケーションの観念．県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要．Vol.5，2004，p.105-116.

[30]三木「解釈学と修辞学」でも比較的似た表現が採られる[23]（p.149）．

[31]なお「言語」の中に「話された言葉」「書かれた言葉」という「る」抜きの言い方と「話されたる言葉」という「る」を加えた表現とが混在している．

[32]McLuhan, M. Understanding Media: The Extension of Man, N.Y: McGraw-Hill,1964,364p.＝マクルーハン著・栗原裕，河本仲聖訳．メディア論．東京，みすず書房，1987．381p.

[33]吉見俊哉．メディア論の系譜．吉見俊哉・水越伸．メディア論．東京，財団法人放送大学教育振興会．2001．p.93-104.

[34]言葉と言葉を載せる乗り物の双方がメディアになるというのは，[32]の有名な“メディアはメッセージである”[32]（p.7）という言葉と同様である．このフレーズについて[33]は“メディア概念の重層性”[33]（p.94）という言葉で表現するが，中井の「言語」の一連の記述もそれらに近い．

[35]「外なる言葉」と「内なる言葉」についての「言語」での中井の説明は次のようになる．“ディアレクティックとレトリィクを思惟の二対の合唱者であるといったアリストテレスが，その著書において論証的思惟に先だって，exoteric discourses にあたるものをもって問題の提出者たらしめし，そのしかたの中には，みずからに語る内なる言葉と他に語りかける外なる言葉の分かちがたき溶融をそこに見いださしむる”[1]（p.223）．要するに上記の引用に即すると自らに語る言葉が「内なる言葉」，他に語りかける言葉が「外なる言葉」である．

[36]Ross,W.D. Aristotelis Ars Rhetorica Oxford Classical Texts＝アリストテレス著・戸塚七郎訳．弁論術．東京，岩波書店，1992．525p.

[37]戸塚七郎．訳者註．アリストテレス著・戸塚七郎訳．弁論術．東京，岩波書店，1992．525p.pp405-505.

[38]歴史的にはギリシアにおいて弁証法と修辞学の一致がすべての哲学者においてみられたのではなく，プラトンの場合も違うという指摘は，中井「言語」に記されている[1]（p.219）．それどころか「委員会の論理」ではプラトンのみならずソクラテスさえも微妙な位置で記される．“氏族貴族に取り巻かれていたソクラテス，およびみずから氏族貴族であり，商業貴族的民主主義に対して最後の革命を挑んだクリティアスを叔父とするプラトンは，この弁論の氾濫に秩序を要求した人々にほかならないのである”[2]（p.11）[1]（p.47）．なおアリストテレス『弁論術』では次のように弁証法と弁論術（修辞学）の関係が記される．“弁論術は，初めにも言った通り（二二頁参照），弁証術の一部分であり，同類だからである”[36]（p.34〔（　）は訳書オリジナル〕）．なおこの「初めにも言った通り」という箇所に該当するこの古典書の最初のフレーズでは次のようになっている．“弁論術は弁証法と相応ずる関係にある”[36]（p.22）．ここに詳細な訳注が付く．第一原理に基づかず，通念に基づいた推論である点，よってどの問題についても賛否両方の結論を導きうる点が，双方の共通点であると邦訳者は述べる．ただし題材については弁証法はあらゆる問題を対象とするが弁論術は政治的話題がほとんどである点，弁証法は問答で相互的に議論を進めるのに弁論術は連続的に語る点，弁証法は一般的原理を結論とするが弁論術は個別的な課題を結論とする点，以上三つが両者の違いである[37]（pp.405-406）．つまり中井は弁証法と修辞学の近さを指摘するが，近接性を示すアリストテレスのテキスト表面上の発言とは別に，他の部分も含

めたアリストテレスの発言の実質，内容上は戸塚のいうに両者は遠いといえる．特に弁証法は双方向的な対話，問答であるのに対して，弁論術は一方が連続的に語るものである点は，ブチャーに依拠した中井の全般的な枠組みの妥当性にも関わる．例えば『弁論術』で次のように記される．“ところで，忘れてならないのは，弁論の各種類にはそれぞれ異なった表現方法が調和しているということである．というのは，朗読用に書かれたものと討論用のものとでは，表現方法は同じではないし，討論用のものでも，議会用のものと法廷用のものとでは，やはり同じではないからである”[36]（p.362）．この引用部分だけだと「朗読用に書かれたもの」の対立項は「討論用のもの」と記されるのみで，そちらは「書かれたもの」のカテゴリーに入るか否かやや不明であるが，暫く後に続けて次のように記され，対比が明確に示される．“表現方法は，書かれたものが最も精確で，討論におけるものは，演技するのに特に似合っている”．実際に書かれているか否かは別にして，「書かれたもの」と「討論におけるもの」等書かれたもの以外というカテゴリー分けは成立している．また次のようにも記される．“また，これら二種類の弁論を並べてみると，文章作家（弁論作者）の言論は，公けの討論の場ではこせついて見えるし，弁論家の言論は，語られると立派であるが，手にとって読むと素人っぽく見える”[36]（p.363〔（ ）は訳書オリジナル〕）．よってアリストテレスにおいて弁論（術）には「書かれた言葉」に属するものも「話された言葉」に属するものもあり，なおかつ基本的に文字に記録されるものである．なお中井自身「思惟の合唱者」と表現するが，それに相当する上記引用の“相応ずる関係である”[36]（p.22）という部分への注にて，合唱に引きつけて戸塚は次のように述べる．“本書では，両者の関係は antistrophos と表現されているが，この表現は，もともとコロス（合唱舞踊隊）の上演時の動きについて言われるもので，コロスが，初めは右手から左へ廻りながら歌う（strophe）のに対し，その後で，これに対応する同じ動きを左手から右に向かって行うことを指す”[37]（p.406〔（ ）はオリジナル〕）．このようにコロスの比喩で弁証法と弁論術の近さをアリストテレス自身はいうものの，“弁論術と弁証術の間にそのような正確な対応が認められると言っているのではないことは，他の箇所で，弁証術の派生物である（三三頁）とか，その一部分である（三四頁）と表現されていることを見れば明らかである”[37]（p.406〔（ ）はオリジナル〕）と戸塚は付け加える．要するに戸塚の発言に照らすと，中井は弁証法と弁論（術）の近さを示唆するアリストテレスの発言に，実際の近さ以上の近さを読み取っているといえる．

[39]中井「言語」では次のように記される．“そしてそれが，一般であれ特殊であれ三段論法であるかぎり，それはディアレクティクの管掌のもとに進められる．その意味においてディアレクティックの熟達者こそ，またレトリィクの熟達者となりうると彼はいう（『レトリカ』一、三五五、a）”[1]（p.220〔（ ）はオリジナル〕）．そこで『弁論術』の当該箇所を見てみよう．中井が割り注を付けた 1355a は，戸塚七郎の岩波文庫邦訳では p.26 からの文章に相当する．“しかるに弁論術における論証というのは説得推論のことであり，それは，一口に言って，説得の中で最も有力なものであるが，この説得推論も一種の推論であるし，また，推論の全般に亘ってくまなく考察するのは，全体か，それとも或る一部かはともかく，弁証術の仕事であるから――それゆえ，弁証術における推論がどのような要素からどのように組み立てられるかを最もよく見究めることのできる者は，また，説得推論がどのようなものを対象とし，論理的推論と比べてどのような違いがあるか，この点の知識を手にする時には，説得推論についても最も精通した者になるであろうことは明らかである”[36]（p.27-28）．要するに，弁証法での論証は論理的推論であり，弁論術の論証は説得推論

で，一応違う推論であるが，弁証法は推論全般に亘って考察するものなので，弁証法の熟達者は弁論術にも習熟すると語る．その点で中井の「言語」での上記の引用文と趣旨は同じである．

[40]三木清．哲学ノート．東京．新潮社．1957．201p.

[41]三木清. 三木清全集第12巻. 東京, 岩波書店, 1967. 459p.

[42]中井は論理を「思惟」「内なる言葉」に近づける．中井の論理が「内なる言葉」に結びつくことを典型的に示す論文は「意味の拡延方向ならびにその悲劇性」（1930）である．同論文の骨格は次の引用部分に集約される．“この内なる言葉，すなわち思惟としての意味領域は，それは意味の充足的作用であり，対象的論理構成への方向である．これに反して，外なる言葉，すなわち主張としての意味領域は，意味の拡延方向への，充足不充足は別として，一つの確信をそれと同一意味をもって他に確信を要求するの方向である”[1]（p.266）．「内なる言葉」を意味の「充足」，「確信」に結びつけ，「外なる言葉」を意味の「拡延」，要するに他者の承認を求めることに繋げ，さらに「主張」に結びつける．このような「主張」の場面では論理性は歪み，嘘言が生じうるとされ，次のように記される．“その場合の命題における「ある」は論理的エレメントであるSとPを複合せしめる連辞ではなくして, むしろ社会的エレメントであるAとBを複合せしめるモメントであることになる” [1]（p.266）．これらの引用に見るように論理を「内なる言葉」に結びつけ，「外なる言葉」「主張」を論理性の社会性による歪みと取る中井は，論理のロゴスとしての公的性格を強調する三木とは違う．三木の「レトリックの精神」（1934）では次のように記される．“レトリック的に思考するとき，我々は相手のロゴス（理性）よりも彼のパトスに，もしくは彼自身のレトリック的思考に訴え，それにふさわしい言語的表現即ちレトリックを用いるのである”[40]（p.126）[41]（p.135）．このようにロゴスをレトリック的思考の対極に位置づける．そのことを押さえた上で次の文を見る．“（ドイツ哲学とフランス哲学とで考え方が違うという発言がおかしい理由は）論理学的思考は普遍妥当性を有し，各国民各個人等において相違すべきではないからである．それぞれに相違し特殊性を有するのはレトリック的思考，主体的にパトス的に規定された思考でなければならない”[40]（p.126〔（　）は本稿記〕）[41]（p.136）．このように三木においてロゴス，論理は普遍性と結びつき，個別性・特殊性と関連するパトス，レトリック的思考と対峙する．ただし「委員会の論理」での中井は，1.2 で詳述するように「言語」の「印刷されたる言葉」を「印刷される論理」へと進展・変化させることで，「外なる言葉」にもその特有の「論理」を見出そうとする．ただしその「非合理性」への注意の喚起も忘れない．“私たちは今まで，「いわれる論理」（説伏の論理）「書かれる論理」（瞑想の論理）「印刷される論理」（経験の論理）を顧みてきた。この第三の段階で注意さるべきは，それは非合理性がその中にあることである” [1]（p.55-56）[2]（p.19）と．また次のように「思惟の論理」と「究明の論理」を分ける発言も「委員会の論理」にはある．“一般に論理は，自我内の単一的な思惟の論理とも論争における究明の論理とも区別されずに考えられすぎている” [1]（p.69）[2]（p.33）．このように述べて本注冒頭に挙げた「意味の拡延方向ならびにその悲劇性」同様，「確信」と「主張」の峻別に論を進める．要するに「意味の拡延方向ならびにその悲劇性」の書かれた 1930 年において「自我内の単一的な思惟の論理」のみが論理であったのに，「委員会の論理」の記された 1936 年では「主張」における「究明の論理」がもう一つ論理として認められるに至っている．そしてここに本稿 1.2 で後述する，「印刷される論理」が単に「言葉」ではなく「論理」として成立する余地もある．[49]参照.

[43] Cassirer,Ernst. KANTS LEBEN UND LEHRE,

Berlin:Verlag von Bruno Cassirer, 1918. xip., 448 p. =カッシーラー著・門脇卓爾，高橋昭二，浜田義文監訳．カントの生涯と学説．東京，みすず書房，1979. vip. 497p. 18p. vip.

[44]「言語」の p.238 以下では何度かヘーゲルの説明に「中間者」の語が出てくる．例えば以下のように．“彼の現実性の概念もまた，本質と存在，内なるものと外なるものの直接的なる統一となる．そしてこの現実的形成作用は，客観的精神の作用として有限なる主観的精神と，無限なる絶対精神との弁証法的中間者となり，現実的自由意志として働く”[1]（p.238-239〔ドイツ語部分は略した〕）．さらに次のように述べる．“すなわち，見られた存在と，その中に働いている自我の意識の間には一つの飛躍があると同時に，放たれざる同一性があらねばならない．「中間性」のもつ非合理性にはかくのごときものがあるといえよう”［1］（p.240）．ここでいう「中間性」も「中間者」「性」の意である．要するに見る自己と見られる自己との矛盾があり，同時に同一性も担保され，それら二つの自己双方の「中間者」として人間を位置づけている．なお中間者と弁証法との関わりは三木の『パスカルにおける人間の研究』（1926）のテーマであり，中井もこの三木の書への書評にて次のように述べる．“パスカルにおいて，無限に比しては虚無であり，虚無に比しては全体であるところの，中間者 milieu としての人間，そのもつ不安定 inconstante が魂の具体的形式であった”[1]（p.362）．さらに三木追悼の意味も籠めた「カントにおける中間者としての構想力の構想」において，中井は次のように記す．“三木君の思惟を思い返す時，カントの個性の問題を彼が卒業論文として以来，彼の体系の基礎はカントの上に出発しているといってよいであろう．そして，パトスの問題と，中間者の問題は，彼が後に存在論的思惟をはじめるにいたって，中心的根幹をなし，やがて，構想力というカントの Einbildungskraft なる概念が，彼の眼前に大きく浮かび，全哲学体系を，このライト・モティーフのもとに構成していたかに思われるのである”[1]（p.305）．このように「中間者」は三木の生涯に亘るキーワードであり，そのことは中井の強く意識するところであった．また中井の「委員会の論理」でも「中間者」について次のように表現される．“物自体はカントの体系では一方，すなわち『第一批判』では経験の素材として，他方，すなわち『第二批判』では実践の主体として意味をもっている．・・・一方は自然と現象の要請者となり，他方では自由と理念の要請者となるのである．しかも，非合理的穴となることは両者において共通である．感情はその両者の中間者であり，媒介者であり，連続者である”［1］（p.59-60）［2］（p.23-24）．いわば『第一批判』つまり『純粋理性批判』の対象領域と『実践領域批判』の対象領域を繋ぎ，媒介するのが「感情」という『判断力批判』の領域なのである．ここでは「媒介者であり，連続者である」とその媒介の連続性が強調されている．このカントの２批判の領域の媒介の意味での『判断力批判』の位置づけについては[78]を参照．いわば注[8][11]で述べたメディウム，ミッテル２つの媒介でいうと，このような「中間者」は「連続者である」という言い方からもメディウムに相当する．他方次に見るカッシーラーはカントの２つの批判の媒介をあえて「中間者」として捉えない．以下の文中の「自由の世界」は『第二批判』の世界であり「自然の世界」は『第一批判』の世界である．“自由の世界と自然の世界との真の媒介が成立するのは，存在の国と当為の国との間に何らかの中間的本質領域を挿入することによってではなく，経験的自然説明の原理と道徳的判定の原理との双方に同等の仕方で関与するような考察法を発見することによってである”[43]（p.305）．この引用部分の「中間的本質領域」は「委員会の論理」で先に引用した文章の「中間者」に相当しよう．いわばそのようなメディウムから脱したものが上記引用文の「考察法」になるとも考えられよ

う．もっともカッシーラー校訂の新編集の全集による『判断力批判』を用いた「カントにおける中間者としての構想力の構想」で中井は，カントがメディウムに留まっていたことを指摘し，三木もそうであったと示唆する．“ここにしるすものは，この問題で，一七七三年より一七九〇年まで，カントがたどった一七年間の紆余曲折の記録である．そして，ついにメディウムとしての中間者を脱することができず，ミッテルとしての媒介に到達できなかった苦闘の記録である．苦しかった三木君の思惟の跡を弔うにあたって，思惟のもつ，いたましいある種の厳粛さ，として，はなむけとする次第である”[1]（p.306）．

[45]佐藤晋一．中井正一・「図書館」の論理学．東京，近代文藝社，1992．275p.

[46]門部[26]（p.133）は「言語」での「いわれる言葉」「書かれる言葉」「印刷せる言葉」の記述が，ブチャーの古代ギリシアに対する記述からアイデアを得たとし，その上で次のように指摘する．“着目したいのは，ブチャーの議論に言及した後，中井が言語活動の場に論理や思惟を位置づけ，それらの歴史的変容を考察したことである”．もちろん「言語」「委員会の論理」両者の違いを検証する余地には言及しないので，当然それを否定する訳ではない．ただしブチャーからの引用と「委員会の論理」との継続性は示唆する．なお門部[9]は，「言語」をはじめとする“中井の言語活動論は過渡期の議論であったが，「委員会の論理」を準備するものであったのである”[9]（p.126）と指摘する．[9]は「言語」と「委員会の論理」との対応も検証するが，同論文では「言語」から「発言形態と聴取形態並びにその芸術的展望」（1929）への展開に多くの紙幅が割かれ，「言語」の「印刷された言葉」と「委員会の論理」の「印刷される論理」の中身の異同の検証はない．“言語活動論から「委員会の論理」に至る過程では，本稿では言及できなかった種々の変化が生じている”と門部が記す内容の一つはこの問題の可能性もある．もちろん門部[29]のように「委員会の論理」自体を緻密に読み込む論文では，「委員会の論理」の中での「書かれる論理」と「印刷される論理」双方の断絶に着目する．“言葉の理解に一義的な意味志向が要求された「羊皮紙に書くこと」の段階とは異なり，「印刷される論理」における言語は，一義的な意味志向とは異なるものとして特徴づけられている”[29]（p.111）．ただし二つの文字文化の間のこの断層が「言語」を含めたそれ以降の一連の言語論にはなく，「委員会の論理」にてはじめて現れたことの指摘がない．とはいえ本稿も事実の指摘とその意味づけの考察に留まり，理由は探り切れない．[29]は「委員会の論理」上篇の「いわれる論理」が中篇の「討論」に，「書かれる論理」が中篇の「思惟」に，それぞれ相当するという．そしてここでは“議論は歴史的な文脈から引き離され”るとされる．では上篇の「印刷される論理」が中篇のどこに活かされるのかは，必ずしも明示されない．「委員会の論理」自体でも[1]（p.67）[2]（p.31）の図では，「印刷される論理」が「実践」「技術」「生産」に相当するとは記されるが，正直図が唐突で文章での説明が追いついていない．あるいは[29]において“「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」など，歴史上に現れた論理の現象形態は対立物に転化しつつ，「委員会の論理」の構成要素となる．その際，これらの諸論理を総合する重要な契機となるのが＜提案＞，＜計画＞，＜報告＞，＜批判＞という実践の論理であり，これが委員会での集団的コミュニケーションに対応している”[29]（p.112）と記されるが，「印刷される論理」がどこにどう介在するか具体的な姿は[29]に記されない．多分に「委員会の論理」の図はともあれテキスト自体が曖昧で，他方図自体の説明がテキストでは不充分で，図と綿密に照らした上でのテキストの解読作業が今後必要とされる．[29]は引き続いて中井の映画論の集団のイメージの究明へと向かい，「委員会の論理」の対面状況と映画の非対面性を

比べる．この映画の非対面性と「印刷される論理」とを結びつけて考えることが答えに向けての一つのヒントとなる．なお[45]は，「言語」での中井はブチャーに依拠し「書かれた言葉」と「印刷された言葉」との距離を低く見積もるが，そのことが次なる中井の課題として，印刷された言葉の時代における“問うことの意味”の探求を浮かび上がらせると指摘する[45]（p.34-35）．この発言は，「言語」の「印刷される言葉」と「委員会の論理」の「印刷される論理」との差に着目することの重要性を先駆的に示唆していたと解しうる．

[47]後藤和彦．コミュニケーション史の研究史．講座コミュニケーション２ コミュニケーション史. 江藤文夫，鶴見俊輔，山本明編．東京，研究社，1973，p.193-230.

[48]鶴見俊輔．戦後からの評価．美と集団の論理．中井正一．東京，中央公論社，1962，p.285-290.

[49]なお鶴見は次のように記す．“中井正一は，論理と歴史とを直接にむすびつけてごういんに歴史の発展段階を考えてゆく方法をとらずに，論理と歴史とのあいだにコミュニケイションという中間項をいれて考えた”[48]（p.286）．時代の変遷をいわば独立変数のようなものと考え，コミュニケーションの様式ないしはメディアを媒介変数とし，論理のあり方を従属変数とする点で，[47]と[48]は基本的な視座を等しくしている．[42]で見たように，この「印刷される論理」という表現を採ることではじめて，「内なる言葉」においてのみ成立していた論理が「外なる言葉」においても成立する．

[50]とはいえ「委員会の論理」冒頭 1 では注[39]冒頭で引いた「言語」の章句と似た文章にて，アリストテレスにおける弁証法論理学の熟達者と修辞学のそれとの一致の問題に言及される．“その意味でディアレクティクの熟達者こそ，またレトリィクの熟達者となりうるのである（『レトリカ』一、三五五 a）” [1](p.48) [2](p.12)．ただし[42]の引用文にあるように“いわれる論理（説伏の論理）” [1](p.55) [2](p.19)という記述が一部にある．修辞学に直結する“説伏の論理”が併記されることからしても，「いわれる論理」という表現それ自体が論理学と修辞学の一体化を示唆する．その点でこの問題は後景に退きつつ通奏低音となる．それとギリシア時代と近代のヘーゲルに焦点を当てた「言語」において論理学は弁証法論理学のみを意味するが，古代から現代まで通観する「委員会の論理」において論理（学）に様々なものを含みうる点も，後景に退く理由として考えられる．

[51]Habermas, Jürgen. Struktuwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der Bürgerlichen Gesellschaft, Berlin : H. Luchterhand Verlag GmbH, Neuwied 1962，291p. ＝ハーバーマス著・細谷貞雄訳．公共性の構造転換．東京，未来社，1973．339p．18p.

[52]ハーバーマスの公共圏のような空間が中井周辺で成立していた．実際第一次『美・批評』が京大瀧川事件を契機に第二次『美・批評』へと衣替えし，芸術の議論から政治社会の問題までをもテーマに含むようになったことは，文芸的公共圏が政治的公共圏の先駆けとなるという[51]（p.72-73）の指摘に符合する．

[53][9]は中井の言語活動論のライナッハからの影響を論じ，ライナッハがオースティン，サールの言語行為論に通じるという近年の研究に着目する[9]（p.121）．そこで[9]はライナッハから得た中井の「社会的作用」概念([9]p.124[1]p.258）が言語の行動性を意識しうるものであったと指摘する．die Sozialen Akte が「社会的行為」ではなく「社会的作用」と訳出されたことは「作用」「機能」Funktion 概念も連想させ，不可能事を可能にするビジョンをもたらす．その点は別稿にて論じる．なおここで中井は「落ちない飛行機」と「飛ぶ風船」「死せざるソクラテス」を同じ次元のものと捉えているようであるが，飛行機が事故で落ちること

は偶発的な問題，特殊なケースであり，「飛ぶ風船」や一般に死なない人という意味での「死せざるソクラテス」は自然の宿命に抗する技術であって，より一般的な問題であり，それらを並置することの妥当性は問われうる．

[54]この機能概念への中井の否定的見解とその肯定的可能性については [29]（p.111-112）に詳しい．

[55]Cassirer,Ernst. Substanzbegriff und Funktionsbegriff ： Untersuchungen uber die Grundfragen der Erkenntniskritik, Berlin:Verlag von Bruno Cassirer, 1910. xvp. 459 p. =カッシーラー著・山本義隆訳．実体概念と関数概念：認識批判の基本的諸問題の研究．東京，みすず書房，1979．448p. 18p. xip.

[56]そもそも中井の機能概念の着想の基になったカッシーラーの著書は，高等数学の発達を意識して書かれた本である．この書物の「まえがき」の最初にて次のように記される．“本書に収められた研究は，もともとは数学の哲学のための研究によって促されたものである．論理学の側から数学の基礎概念への橋渡しを得ようと試みたさいに，何はさておき，〈機能概念それ自身〉をさらに詳細に切開しその前提にまでさかのぼることが必要となった” [55]（p. i ）．

[57][48]の邦訳の題は『実体概念と関数概念』でFunktionsbegriffをタイトルの限りでは「機能概念」とはせずに「関数概念」と訳出している．

[58]カッシーラーの機能概念にはここまでみてみたように，概念の機能，方向性を示すという点で画期的である反面，専門家の専有物の面があり，それを弁証法の双方向性によってその否定的側面を乗り越えるというのが，中井の戦略であると思われるが，この辺りは今後もう少し究明していきたい．

[59]後藤嘉宏．中井正一とコミュニケーションの双方向性．マス・コミュニーション研究．57，2000，p.122-137.

[60]なおスポーツにも双方向性があり門部はそれを“逆関係的否定性”[26]（p.139）と名づける．[29]は[59]がコミュニケーションの双方向性を中井に見出しつつ，スポーツの二方向性を看過している点を批判する[29]（p.115）．中井の方向性について彼のスポーツ論も含めた検討が今後必要である．

[61]針生一郎，松岡正剛．中井正一をめぐって．美術手帖．493，1982，p.132-143.

[62]後藤宏行．生産の論理と存在の論理．名古屋学院大学論集．4，1965，p.271-291.

[63]「委員会の論理」は嘘言の媒介に言及するが，一般的には中井が嘘言を否定的に捉えたと解される．ただし[61]の対談にて松岡正剛は中井が嘘言を肯定的に捉えた点に着目すべきという．松岡は引かないが，松岡の見解の先駆に[62]がある．[42]で見たように中井が「内なる言葉」にのみ「論理」を見出していた際は，「外なる言葉」「主張」は否定されるべき嘘言となる．「外なる言葉」にも「論理」性を見出し「印刷される論理」を導くとき，嘘言は広い文脈に立ち返ると「真実」になりうる．

[64]商品の世界の歪みの是正については[7]（p.200）がその読み方を解釈としては示しつつ，中井のそういう見通し自体の甘さを批判している．本稿注[109]参照．

[65]久野収．後記．[23]p.423-432 所収.

[66]廣松渉ほか．岩波哲学・思想事典．東京，岩波書店，1998．1929p.

[67]Alain. System des Beaux-Arts,Edition nouvelle avec notes, Paris:Gallimard, 1926＝アラン著・長谷川宏訳．芸術の体系．東京，光文社，2008．544p.

[68]引用文中に久野の記した書誌事項は，彼自身の編になる著書についてであるが誤っていて，引用から略した．なお久野の第 3 文にいう“認識の論理”[65]（p.428）とは狭い意味での認識論というよりは，認識の論理としての弁証法を意味する．例えば次のような意味で．“ここ（『エンチクロペディ』）には彼（ヘ

ーゲル）が弁証法を〈思考および認識の原理〉と模したことが表明されている”[66]（p.1462-1463〔（ ）は本稿記〕）．なお正確にはこの久野の文章は，「解釈学と修辞学」と[23]でその前に置かれた「表現に於ける真理」（1935）双方の解説ではある．ただし「表現に於ける真理」は『芸術の体系』[67]の著者アランからの影響が強く，中井のギリシア思想への扱いと比較可能な箇所はあまりない．アランは基本的に芸術家は外の有様を素材に写すのではなく，自分の思いを描くのでもなく，素材そのものが訴えかけてくるものを表現するのだという．例えば大理石の前に佇んだ彫刻家は目の前の大理石を見てその本質を描こうとするという[67]（p.299）．このアランの着想が三木のこの論文を支配しているので，レトリックと中身との対比というよりは，レトリックそのものを偏重する姿勢が貫かれる．またこの論文のタイトルにも窺われるように，ここではまだ久野のいう真理性と真実性との対比はない．芸術や修辞の側には「真実性」があるという言い方ではなく，例えば次の文のように芸術表現の方にも「真理」や「真偽」という言葉を充てる．“単にその理解や解釈ばかりでなく寧ろ根源的には表現的なものそのものが真或は偽と語られる”[23]（p.111）．

[69]戸塚七郎．解説．アリストテレス著・戸塚七郎訳．弁論術．東京，岩波書店，1992.525p.pp.507-523 所収．

[70]アリストテレス『弁論術』「解説」ではプラトンの弁論術批判について次のように記される．“しかし実際的効用が直接求められる場面では，説得の実を挙げることに弁論のすべての価値がかかってくる．そして，この点に過度の要求が集中すると，真実についての説得という本来のあり方を逸脱し，歪められて，弁論が事実の世界から遊離するようになる．『ゴルギアス』の中でプラトンが弁論術に容赦ない批判を加えるのも，かかる傾向が顕著になってきたからに他ならない”[69]（p.510-511）．この解説文に従えば，プラトンは，弁論術と論理との距離，遠さをむしろ意識して語っていた．だからこそ本稿本文で“論理がなければならず”[23]（p.149）と義務的表現を三木が採ることになるのかも知れない．“プラトンは哲学者の眼をもつて，当時の文化のうちに浸潤した修辞学に伴ふ種々の弊害を洞見し，仮借することなく批判した”[23]（p.144）とも記される．[38]も参照．

[71]ここには三木がドイツで最初に師事したリッケルトの師であるウィンデルバントの個性記述科学と法則定立科学の対比が背景にある．中井の恩師深田康算は芸術の個性至上主義を批判しようとして独自の美学をうち立てようとした．さらに中井が多く依拠した[55]は，同じ新カント派に属するリッケルトへの批判を展開する．ウィンデルバントの個性記述科学と法則定律科学の分類は，学問の分類と方法とをほぼ直結させる．人文社会科学は個性記述的な方法を採る学問であり，自然科学は法則を探求する学問であると．それに対してリッケルトは個性化的方法と一般的方法という言い方をする．要するに単なる師の言い換えではなく，学問分野と方法を直結させずに双方が単に親和性をもつにすぎないと理解する．人文社会科学は個性化的な方法を多く採るし，自然科学は一般化的方法を多く採るとして，例えば人文科学において双方の方法が混ざることを否定はしない．さて，そう考えた際であっても，一般化的方法による概念は個性化的方法，つまり記述的な方法で捉え得た個々の事物の特質を掬い切れず，こぼしてしまう点をリッケルトは否定的に理解する．しかしカッシーラーにいわせればそのような否定的見解をリッケルトが抱くのは，一般化的方法による概念を彼が実体概念で捉えているからに他ならないことになる．“現実を概念的に理解することが現実に固有の基本的内実を消し去ることと同じになる．この結果がいかに奇異に聞こえようとも，しかしそれはリッケルトの理論の基礎に置かれた前提からはじっさいに否応なく結論づけられることである．旧来の論理学が説いているように，概念が「共通

なるものの表象」でしかないのであれば，概念は特殊を特殊〈として〉使えることができず，またいつまでも不可能なままである”[55]（p.253）．一般化的方法を採る際に実体概念で事物を把握するから，記述的な方法で保たれる個別性と，この概念での把握とが対立する．しかし関係概念で事物を把握すれば，それは個別性と対立しないどころか，個別の事柄をより明確に把握できるとカッシーラーはいう．例えば化学を例に採る．“化学的概念構成が発展すればするほど，それだけ鋭く特殊を＜区別する＞能力が際立ってくる．未発達な概念の立場からは同じに命名されていた物質が，発達した概念の立場からは，「異性体（Isomer）」として相互に判明に区別され，その特徴が画然と特定されるのである”[48]（p.256〔＜　＞はオリジナル〕）．この化学の例を踏まえてカッシーラーは次のように語る．“ただ漠然たる＜類表象（Gettungsbild）＞という普遍性のみが，個別の固有性を脅かすのであって，他方，一定の関係法則の普遍性は，この固有性を保存しあらゆる側面から知りうるようにするのである”[55]（p.256〔＜（　）＞はオリジナル〕）．ここでいう「類表象」は実体概念に結びつき，「関係法則」は機能概念に結びつく．本稿 5．冒頭でも見るように，三木は機能概念にやや否定的である．三木は留学中不満を覚えたにせよリッケルトに近く，中井の依拠するカッシーラーは今見たようにリッケルト批判で機能概念の内実を明確にしていくことから，三木と中井の機能概念への態度に差が生じるのは，ある意味で当然である．

[72]注[39]で述べたように，弁証法と修辞学との関係は中井のようにそもそも近いものであると捉え，弁証法の熟達者が修辞学にも熟達すると述べた方が，アリストテレスの論述に忠実な論の順序である．三木の場合『構想力の論理』にて形を明示する弁証法を「構想力」と称していることから，形と修辞学との関連性からしても，弁証法と修辞学の結びつきは後に生じるものとの読みとり方をすると推測される．

[73]とはいえ中井の「言語」には「中間者」「ロゴス」「形成作用」といった三木のライトモチーフとなる用語が出ていることも見逃せない．三木「解釈学と修辞学」もロゴスとパトスについては多く言及する．「中間者」については[44]も参照．

[74]中井正一．中井正一全集第 4 巻．東京，美術出版社，1981．375p.

[75]田中久文．日本の「哲学」を読み解く．東京，筑摩書房，2000．238p.

[76]後藤宏行．転向と伝統思想．東京，思想の科学社，1977．341p.

[77]中井の恩師深田康算は天才の個性や独創性を重視した近代美学に懐疑の眼を向けた．中井はそこから自らの理論を出発させた．[71]で見たように三木はむしろリッケルトの影響を受け，初期には個性志向が著しいし，『構想力の論理』にも天才賛美が見られる．しかし遺稿『親鸞』を併せ検討すると，通常の天才，個性志向とばかりはいいきれない．この点につき三木の天才論は万人に備わる天才性に着目したものだと[75]は語るが，[75]より遙か以前に[76]が『構想力の論理』を『親鸞』と併せ読むことでそういう解釈が可能であると指摘している．

[78]確かに次のように「言語」でも記される．“ブチャーによれば，彼らは「合理的思想」としてのロゴスの働きを「合理的言説」としてのロゴスの使用と不可分であると考え，知識の材料の上に形成的に働くこころの働きは，二つの人格的な知恵の衝突なくしては・・・ほとんどじゅうぶんに腕をふるうことができぬと考えた”[1]（p.218）．しかしこのロゴスと「こころの働き」の相互作用・媒介はあくまでもブチャーの言として示され，中井自身の立場か否かは明言されない．さらにまた中井は「言語」より後の時期になり，カントの二批判の真理の違いを強調するようになり，その二つを繋ぐものが芸術美への判断力であると述べ

るに至る．この二批判のうちの『純粋理性批判』の領域が真理性，『実践理性批判』の領域が真実性に，それぞれ繋がると見ることも可能である．そして別稿で論じるが，三木の場合『実践理性批判』の領域と『判断力批判』の領域の区別の意識の弱い点が，中井との違いともいえる．中井の場合『純粋理性批判』『判断力批判』二つの批判の領域を繋ぐものが『判断力批判』の領域である美や感情であるということになるので，当然『実践理性批判』の領域と『判断力批判』の領域とは強く区別される．要するに「真理性」と「真実性」が矛盾し，その矛盾を弁証法的に「媒介」するのが「芸術」の領域であるというのが中井の考え方である．

[79]三木清. 三木清全集第15巻. 東京, 岩波書店, 1967. 630p.

[80]なお注[38]で記したように，アリストテレス自身において弁論は必ずしも「話された言葉」に属すものばかりではない．もっとも三木「解釈学と修辞学」も中井「言語」同様，弁論術（修辞学）を「話された言葉」に位置づけている．“解釈学が主として書かれた言葉，誌された文書に向ふに反して，修辞学は主として話される言葉に属”[23]（p.140）す．

[81]三木清. 三木清全集第16巻. 東京, 岩波書店, 1967. 610p.

[82]「解釈学と修辞学」では「形」について次のように記される．“修辞学は弁証法を根底とする形の論理である．修辞学の形は弁証法的な形である．かかるものとしてそれは単に私に属することなき超越的なものである．・・・言葉がロゴスといはれるのは，それがパトスに対する意味に於けるロゴスであることを謂ふのではなく，却つてそれが超越的なイデー（形）であることを意味するのでなければならぬ”[23]（p.154-155）．いわば三木において修辞学も「形」に関わるものであった. そして「超越的なイデー（形）」と記されることからも，イデア論と形が結びつく．中井が実体概念をイデア論に由来するとしたように．

[83]注[71]で見たように，三木の個性志向はリッケルトに由来しており，カッシーラーの実体概念批判は[71]で確かめたように，リッケルトの記述的方法への拘りに対する批判があった．よって，三木が機能概念に少し違和感を抱くのは当然である．

[84]熊野純彦．カント：世界の限界を経験することは可能か．東京，日本放送出版協会，2002．125p.

[85]金田千秋．判定構造論の射程：カントの判断力批判．美學．42(1)，1991．p.24-35.

[86]『判断力批判』を芸術美よりも自然美の崇高性を扱った書と読まれるのが妥当との見解もあるし[84]，カントのこの書の Kunst は従来芸術と訳されてきたが，その単語単独では芸術ではなく技を意味し，“技はーそれが自然と見える限りにおいてー美しい技〔芸術〕である”[85]（p.27〔〔　〕は金田〕）と解釈すべきとの見方もあるが，基本的にこの本は美学の基本文献とされてきた．カントは構想力及び判断力を『判断力批判』以外でも扱うが，基本的に『判断力批判』で大きく取りあげる．よって構想力を主題とする『構想力の論理』は本文引用部分の三木の発言のように，美学の基本書の問題設定を踏まえ，それを前提にしつつそれへの乗り越えを図っていることになる. なお「構想力」を「美の領域」から解放すべきという[13]の主張と同じ趣旨の発言は「解釈学と修辞学」にも見られる．例えば次のように．“修辞学も哲学的論理としては単に言葉のみではなく現実の存在そのものに関係附けられることが必要である”[23]（p.141）．さらに次の文ではもう少し明確に『構想力の論理』に照合する．“そして修辞学がその端緒の本質に従つて芸術の領域から行為の領域へ連れ戻されねばならぬように，構想力の論理も美学の領域から倫理学（政治学）の領域へ連れ戻されねばならぬ”[23]（p.151）．

[87]西田幾多郎．善の研究．東京，岩波書店，1979. 254p.

[88]これは一見逆転であるが，ある意味逆転ではなく

当然の帰結である．注[78]で述べたように中井の場合，美や芸術は，自然の領域つまり知情意の「知」と社会や道徳の領域つまり「意」とを繋ぎ，媒介する領域で，「情」に位置する．他方三木やその恩師西田にあっては，知情意の「意」と「情」との区別があまりなされない．“強く情意を動かす者が特に個体的と考えられるのは，情意は知識に比して我々の目的その者であり，発展の極致に近いからであると思う”[87]（p.35）．そこで自然の領域「知」に対して，社会や道徳並びに芸術の領域「情意」が纏まって対立する．したがって「真理性」と「真実性」の対立も，「情意」による「真実性」の優位の状況での乗り越えが唱えられ，芸術は倫理と不可分なまま，現代社会の救いの手としてナイーブに期待される．例えば「解釈学と修辞学」でも次のように記される．“ひとが誰かを相手に話すとき，ひとは相手が如何なる心の状態にあるかを，彼の感情とか気分とかを殆ど無意識的に考慮し，言葉はこれによつて規定される．ひとは単に相手のロゴス（理性）にではなく，また彼のパトス（情意）に訴へる”[23]（p.147）．ここではロゴスとパトスの対比を「知」（理性）「情意」の対立に重ね合わせる．ところでカッシーラー[43]はカント美学の「目的なき合目的性」を次のように記す．“合目的的な形像物はその重心を自らの内にもち，目的を有する形像物はその重心を自らの外にもつ”[43]（p.332）．要するに美学的なものの「目的なき」というのは，自らの外側に目的を有することのないことを意味する．そして「合目的性」とは自らの内側に目的をもつことを意味する．そして次のようにカッシーラーは語る．“一切の関心を捨象せよというカントの要求は，構想力の運動に，十全なかつ無制限の余地を与えるものである”[43]（p.332）．つまり利害関心は美的なるものの外側に目的を設定するものであるので，「一切の関心を捨象せよと」なる．続けて次のようにいわれる．“ただ意志と直接的欲求へ執着することが斥けられるのは，それが「表象」の直接的生動性を，すなわち，カントにとって芸術的なものの特性であった形象的空想力の自由な造形作用を，阻害し抑圧するからである”（p.332）．例えば政治は『実践理性批判』の領域で，上記引用文の「意志」に相当する．政治への執着は，その意味で美的領域の「目的なき合目的性」に反する．利害関心があり，美の外側に目的をもつ．その意味で三木の『構想力の論理』の政治の芸術化，美学化は，カッシーラーの解釈する限りでのカントの文脈からすると，美の領域の固有性，自律性を放棄すると評しうる．いいかえると三木のような美や芸術の性急な政治化は，芸術のもつ自己充足性，自分の外に目的をもたないことの媒介性を弱めてしまう．また次のようにカッシーラーは語る．“自然法則の存在や道徳的法則の当為は，構想力の戯れのために犠牲にされてはならない．しかし他方ではこの戯れは独自の自律的領域を有し，そこへはいかなる概念の要求も道徳的命法も介入することが許されないのである”[43]（p.343-344）．この引用部分の「自然法則」は『純粋理性批判』の領域であり，他方「道徳的法則」は『実践理性批判』の領域である．それらは「構想力の戯れ」すなわち芸術的行為の犠牲にはなってはいけないし，逆にそこに介入してもならない．要するに知情意それぞれの自律性がいわれている．もちろん自律性は唱えられるが，それらが相互に没交渉というのでは決してない．相互にやりとりがあるからこそ，媒介・ミッテルになる．

[89]三木清. 三木清全集第 9 巻. 東京, 岩波書店, 1967. 465p.
[90]中村雄二郎．共通感覚論 : 知の組みかえのために. 東京，岩波書店，1979．389p.
[91]後藤嘉宏．中井正一と共通感覚．図書館情報メディア研究．Vol.6，No.2，2009，p.15-36.
[92]後藤嘉宏．戸坂潤の常識概念と三木清．図書館情報メディア研究．Vol.5，No.2，2008，p.57-87.
[93]金田千秋．判定構造論の構造：カントの『判断力

批判』．美學．39(2)， 1988．p.24-35.

[94]小林栄三郎．＜カントの理性批判＞の批判．慶應義塾大学日吉紀要．ドイツ語学・文学 ．45，2009．p.49-79.

[95]千葉建．カントの共通感覚論．倫理学．筑波大学倫理学原論研究会．17，2000．p.69-80.

[96]Kant, Immanuel, Kritik der Urteilskraft,1790＝カント著・篠田英雄訳．判断力批判（上），東京，岩波書店，1963，354p.

[97]三木，戸坂潤，中井の共通感覚論については，彼らの論が西田幾多郎の場所論の乗り越えになる点を論じた[90]を参照．なお中井と共通感覚については[90]に依拠した[91]がある．三木と共通感覚の関係は[92]を参照．本稿本文での「方向性」とはそれぞれの人の属性や来歴からくる感覚の独自の配分による，見方の特殊性，個別性を意味する．要するに対象を眺める立ち位置，方向である．様々な方向からの眺めを突き合わせることで「いわれる論理」の双方向性がもたらされる．これは弁護士能勢克男と中井という学士が小学校卒の大部屋俳優斎藤雷太郎と組んで『土曜日』編集に当たったように，全く違う属性の他者の視点を受け入れ，相互に学ぶことにも通じる．そしてそのような多様な方向（感覚の配分）から発言し，共通の対象についての多くの方向からの眺めを知ることで，他者が一つの感覚からないしは自分とは異なる感覚の配分から通常の感覚配分で捉えた世界を想像する姿を，自分が想定できるようになり（例えば生来視覚を奪われたピアニストがムソルグスキー作曲『展覧会の絵』を演奏し，我々がその演奏を，ピアニストの思いを想像しながら聴き込むことなど），共通世界についての我々の理解，「共通感覚」が深まる．これは中井の射影の考え方にも通じるので別稿にて詳述する．なおカントと共通感覚の関わりについて金田は次のように述べる．“要するに共通感とは，趣味判断の服す普遍への包摂の可能性，この可能性の判定構造自体の普遍性である”[93](p32)．このような共通感覚の捉え方は[90]に依拠した本注での理解と異なりうるので，その点は今後検証したい．なお小林栄三郎は次のように語る．“「快・不快の感情」という主観的原理に基づき，美学的・趣味的判断を行なう「共通感覚」（判断 64，上 132）は，何らかの概念を媒体とすることなく，人々の認識の共通性を保証する，と言うのである．このような「共通感覚」の原理に，「コミュニケーション原理」を見出し，そこに現代的な「コミュニケーション理論」の先駆を見出そうとするカント研究者もいる”[94]（p.71〔（ ）は小林．上 132 は岩波文庫邦訳のページ数．判断 64 は邦訳上部にも出ている原著のページ数〕）．これは金田のカント共通感覚理解とは遠く，[90]の共通感覚解釈に近い．また千葉建は“趣味判断に特有の「主観的普遍妥当性」を可能にする条件として，カントは「共通感（Gemeinsinn）という観念的規範を想定せざるをえないと説明している」”[95]（p.69）と述べ，この限りでは[94]の見解と同じである．さらに“しかも，共通感が存在することは，実際にわれわれが趣味判断を下しているという事実から明らかになると述べている”と続ける．ただし共通感覚の存在の仕方をカントは明示的には説明していず，その存在の仕方をドイツ語の「共通感（Gemeinsinn）」とラテン語の「センスス・コムニース（sensus communis）」とのカントの使い分けから，千葉は分析していく．[96]は 40 で「一種の『共通感』としての趣味について」が記される．そこでまず Gemeinsinn と sensus communis を併記する．ただしこれはまだ開発されていない普通の人間悟性という否定的な意味合いをもつという．“ところで我々は，普通の人間悟性を単に健全な（まだ開発されていない）悟性にすぎないとして，およそ人間という名を要求するほどの存在者から期待し得る最小限度のものと見なしている．そこでかかる普通の人間悟性が，普通感（Gemeinsinn ; sensus communis）という名を伏せられるといういわば侮辱的な名誉をもつ

に到ったのである”[96]（p.231）．この限りではGemeinsinnとsensus communisは併記され，カント自身では共に否定的な意味合いをもたされている．しかしsensus communisについてそのような否定的な意味合いを乗り越える必要性が唱えられる．“しかし我々はこの《sensus communis》を，『共通（gemeinschaftlich）感覚』の理念の意味に解せねばならない”[96]（p.232）．このようにGemeinsinnとsensus communisの併記の中から，それを共同体としての同胞感覚に解している．そしてこのgemeinschaftlichとしてのsensus communisを次のように説明する．“要するにかかる共通感覚は一種の判定能力ー換言すれば，その反省において他のすべての人の表象の仕方を考えのなかで（ア・プリオリに）顧慮する能力なのである”[96]（p.232）．いわば他の人の表象の仕方を考える能力が共通感覚である．その点で[90]の理解と対立，齟齬はない．

[98]Arendt, Hannah. Lectures on Kant's Political Philosophy, Chicago: University of Chicago Press,1982,174p.＝アレント著・浜田義文監訳．カント政治哲学の講義．東京，法政大学出版局．1987. 288p.

[99][13]（p.18）．なお『判断力批判』は美学・芸術学の基本文献であるとされるが，例えばアレントによると『判断力批判』の天才論も天才である創作者のためではなく受け手・鑑賞者のための書で，彼らの「判断力」が主題となるという[98]．また金田は『判断力批判』の天才論もある対象を美と判定する判定構造論の文脈の中で理解すべきであると主張する．自然美の判定に趣味が必要であるが，芸術美の判定に際しては趣味の前に技が美しいと判定される可能性のあることが必要で，その可能性を開く目的の限りで天才が必要となる．要するに技が天才の技であることによって，技の所産が自然美に包摂され，美しいか否かの判定が可能となるのであるとされる[93]（p.26-33）．以上のアレントや金田の発言から，『判断力批判』での天才論における天才の役割は限定的なものであるといえる．しかし三木はカントの天才論を，天才の匠の技を判定する鑑賞者のための議論ではなくして，天才である送り手･創作者自身のための議論へと読み替えることで，新たな形を作り出す「形成力」つまり構想力に，話を展開していく．

[100]注[77]で見たように三木の天才論が万人に備わる天才性の話であるとしても，解釈・判断の主体の尊重という意味での受け手重視が，受け手主体にそのままなりうるのかが問題となる．新たに対象・状況を解釈・判断した受け手が送り手になるには，判断・解釈を改めて表現する場が必要で，それが三木の理論ないしは実践にあるか否かが，中井との差を見る上で問われよう．

[101]久野[65]は先に本文 3. で引いたが，「認識の論理とレトリックの論理の合成作業によって，実践主体間の連帯と協力の論理が開示され，この開示の上に「委員会の論理」ははじめてビュロクラシーをこえる基礎をもちうるのである」と記す．他方久野[15]の以下の文はほぼ同じことを記しつつ，ニュアンスは違う．“中井正一の有名な『委員会の論理』（昭和一一年）は自分の論文「言語」と三木さんのレトリックに関する諸論文を前提として，その上にきずかれているからこそ，ビュロクラシーの論理におちこむことを許さない姿勢が生きているのだと思います”[15](p.120)．論文「委員会の論理」を二重括弧で記し，論文「言語」と区別する点は措くとする．この[15]と[65]は三木と中井の関係を述べ，共に「委員会の論理」と官僚制の関係に着目する．[15]は本稿 1. で引用した箇所で中井から三木への影響をまず述べつつ，上記の引用文で三木から中井「委員会の論理」への直接の影響を記す．他方[65]は三木を援用することで「委員会の論理」の解釈の方に与えるであろう，間接の影響について語る．その点で，最初の影響関係が逆で影響の中身についての

趣旨は[15]とほぼ同じである[65]が「表現に於ける真理」と「解釈学と修辞学」の 2 本の論文に充てられた全集第 5 巻の解説文であるので，この[15]における「三木さんのレトリックに関する諸論文」に「解釈学と修辞学」が含まれないはずはない．しかし同論文は 1938 年刊行で「委員会の論理」は 1936 年刊行である．1936 年の論文が 1938 年の論文から影響を受けることは考えられない．よってこの部分に限っては，解釈に与える間接的な影響への言及に自己限定している[65]の説明の方が適切である．

[102]門部は一連の研究で「言語」以外の中井の言語論と「委員会の論理」との関係にも論及するが，本稿ではそこに及ばない．その点は別稿に委ねる．

[103]注[39][72]で述べたように，アリストテレスや中井は本来的に弁証法と修辞学はくっついていると発言するのに対して，三木では切れているものがくっつくニュアンスが強い．また戸塚はアリストテレスのテキストの表面上では非常に近いものとして弁証法と修辞学が捉えられるが，実際には違いも大きいと指摘する．三木の場合本来弁証法が論理でしかないからこそ，「構想力」によって弁証法の成果に具体的な形を与え，修辞学と弁証法がそのとき初めて一体化するともいえる．

[104]注[78]後半に述べたように，中井によるカント理解の中には，この二つの峻別の観点が活かされている可能性があり，その点と「言語」の関わりは別稿にて論じたい．[73]にて触れたように，中井「言語」に三木のロゴスとパトスの弁証法の萌芽がある点もそのことに関連する．また両者の違いは，二人の西田哲学への距離のとり方の違いとも関連しうる．

[105]『構想力の論理』で三木は形式論理学に較べヘーゲル弁証法が過程を捉えうる点で優れると指摘しつつ，ヘーゲル弁証法が基本的に追考的弁証法で，何かを作り上げる際の形を示さないと批判する[13]（p.233;p.508）．新たな形を示すものとして，ヘーゲル弁証法を乗り越えた「構想力の論理」が必要とされる．形とは真理性を越えた真実性に相当するし，[103]にても触れられたように，それは論理で得た「解」を修辞でひとつの形に示すことにも通じる．

[106]中井のカント『判断力批判』解釈が先行するカントの二批判の二つの領域の媒介にあったことと関連するが，詳細は注[78][88][104]を参照．

[107]先に 5. の冒頭に引用した文章に続けて三木は次のように記す．“関係概念と実体概念とが一つであり，実体概念と機能概念とが一つであるところに形が考えられる” [24](p.257) [25]（p.61）．三木は機能概念を否定しない．その限りでは中井の反対を向く訳ではない．

[108]注[105]3 行目参照．

[109]共通感覚とミッテルの関係は[90]~[92]で挙げた諸文献を，ミッテルそのものについては[3]~[5]を，それぞれ参照．

[110]中井正一．中井正一全集第 4 巻．東京，美術出版社，1981．375p.

[111]北田暁大．《意味》への抗い：中井正一の映画＝メディア論をめぐって．マス・コミュニケーション研究．56，2000，p.64-77.

[112]なお本稿はこの久野の批判が必ずしも当を得ているとは考えない．ただし妥当である可能性も視野に入れつつ精査することで，中井の問題を乗り越える可能性をここで述べているに過ぎない．また「委員会の論理」で一度は機能概念批判をした中井の立場から，戦後の彼のスローガン“実体概念としての図書館から機能概念としての図書館”[110]（p.279）を捉え返すとどうなるのか，検証する作業も必要となろう．さらに三木の小文群の中で示された翻訳論は三木の機能概念批判，あるいは中井「言語」の「単なる壺であったのでなくして酒でもあった」というフレーズに照応するので，それを中井の「機能概念としての図書館」と突き合わせる必要もある．さらに中井のミッテル志

向は意味への抵抗の現れの面もあると指摘され[111]，それは「言語」の上記の「酒」発言にも通じる．その点では真理性よりも真実性という「言語」の初志が貫かれるという評価もありうる．

[113]しばしば指摘されているが，現代のメディア環境において活字めいた文字がコンピュータや携帯の端末上で使われつつ，それは口頭コミュニケーション以上に流動的で双方向的でもあるし，サイトは書籍同様その書誌事項が記載されるが，閲覧日によって内容が大きく変わる．固定性と流動性の境界が従来はメディアの区別とほぼ連動したが，それが難しくなっているのが現代の情報環境であると考え，「固定性と流動性について等，従来の枠組みが通用しなくなりつつある昨今のメディア環境」と本稿本文にて表現した．なお詳細は[3]~[5]に委ねるが，本稿「はじめに」第 2 段落以降に記したように，この流動性を強調するとメディアは「媒介」，コミュニケーションとなり，中井のふたつの媒介概念でいうとミッテルとなる．他方，[12]で記したように固定性を強調するとメディウムになる．

[114][6]では後藤和彦がマクルーハンと中井を他の幾人かと並べつつ論じていた[47]．それぞれ世界と日本のメディア論の古典とされるからである．現在[32]はインターネット社会を予見した書として再評価の声が高い．その点は中井の「「実体概念としての図書館」から「機能概念としての図書館」へ」[110] (p.279) というスローガンも同様である．ただしマクルーハンと中井とで活字メディアに対する評価は逆転する．マクルーハンによると写本は文字という他人を支配する抽象的な媒体を用いたが，印刷本に較べ著者の個別性や肉体の温もりは残していた．だが印刷本は抽象化が進み，温もりは消え抑圧的になったという．その点で「書かれたる言葉」の一方向性を強化したものとしてのみ「印刷されたる言葉」を捉える中井「言語」に近い．いいかえるとマクルーハンにも中井「委員会の論理」の「印刷される論理」の逆説性はなく，その点，三木と同様である．そしてこの「印刷される論理」の逆説性こそが，[113]で先述のように会話と活字の機能を併せもち，流動性と固定性の境界の曖昧になっている現在のネット社会での，「書かれた言葉」の実相を適切に照射する．その点で，中井の方が射程距離の長いメディア論といえる．なお[7]はむしろ「書かれる論理」と「印刷される論理」の断絶を強調しつつ，印刷物を身体性の剥奪と捉える点はむしろマクルーハンと立場を共有し，「印刷される論理」をその否定的な相から理解する．[7]によると「書かれる論理」はアウラに守られ“一義的な意味を保護し”，そのために“家父長的関係を強化し”[7]（p.166），拡張する．他方「印刷される論理」には“多義的な解釈の可能性”はあるが，“意味の商品的性格が，このコミュニケーションの特徴”となり，意味は“その市場的な公開性によってささえられている”．竹内はこのアウラの消滅の文脈で捉えるため，マクルーハン同様，印刷メディアの身体性の剥奪の側面を意識する．“印刷物が商品になると同時に，印刷物で伝達し，受容するという行為のありようが，言葉の意味に，商品的性格をあたえる．そうなるのは，言葉が身体性から切り離されるからである”[7]（p.166）．このように捉えると中井の印刷メディア理解の独自性が霞む．ただし相互討論によって印刷メディアの商品としての歪みをただすという中井の趣旨を竹内は理解している．理解はした上で竹内は，討論する人々の意識そのものが商品社会によって歪められている点を顧慮せずに，大衆の潜勢力に期待しても無意味であると主張する．“なによりも，大衆の生活体験そのものが商品世界のなかにあり，人びとはそこで与えられる表象だけをたよりに生きている”[7]（p.200)し，“そもそも大衆は，概念づくりなどという面倒な知的行為とは無縁なところで生きている”[7]（p.200)．そういう生き方をする“大衆の自発的な表現形態は，情念的で偶発的で

無方向であって，そこに協同性など見ることはできないという”[7]（p.200）一般的な見解を[7]は控えめにではあるが肯定する．本稿は中井が商品や制度の歪みを双方向的討論でのりこえようとしたと解釈するが，[7]は解釈そのものは本稿と大筋同様である．とはいえ内容を大掴みにする方法を採る[7]は論証をしない．その点は，本稿とは違うし，中井の見方の楽天性を批判する点も，違う．ともあれ竹内による批判自体は，中井の限界を適切に照射する．しかし中井の未来社会への楽天的な眼差しには，単に商品社会への見通しの甘さという批判では通貫できない強靭さがある．